



メッシーナ行き列車の窓ガラス上下スライドは締め付け・解除を特殊な工具で行う。暑かったので巡回してきた車掌に頼んで開けて貰った。

列車は出発の遅れをそのまま引きずって進行したようだ。しかし乗り継

ぎ時間に余裕があるから、のんびり車窓風景を楽しみ七十枚近く撮影した。コストが唯に近くなければ、とてもこれほどの枚数にはならないだろう。

カタニーヤに近くなり、平行する道路を見覚えのあるダブルデッカーが行く。アグリジェントから利用したのと同じものと思われ、若干興奮して7ショット。あとで調べると、同会社、同形式バスだけれど、時刻的に1時間以上の差があり、同じ便ではなかった。

カタニーヤの乗り換えも、数分出発が遅れた以外にさしたる問題はなく、車窓風景を楽しみながら40分少々乗車でTaormina-Giardini 駅に無事到着した。あとで知ったことだけれど、タオルミーナ駅はなく、タオルミーナと海浜リゾートのジャルディーニ・ナクソスとの中間に上記駅がある。

この駅には観光案内所があり、中年の男女二人が待機していたが、利用者は誰もいない。タオルミーナはシチリア屈指の観光地だけれど、列車で訪れる人は少ないらしい。男性の方が対応してくれた。

地図は簡単に入手できたが、ホテルその他の情報は —— タオルミーナの中心部にある観光案内所で訊いてくれ —— といわれる。駅に接近中の約1キロ、車窓からたくさんのリゾートホテルが見えたことを思い出し、それについて尋ねると、別の地図(ジャルディーニ・ナクソス)を取り出し、この緑丸が全部ホテルだと教えてくれた。ほとんどが海沿いで四十近くある。

もともとタオルミーナにホテルを求めることは抵抗があった。先程も書いたように、あまりにも著名な観光地だし、それ以外の産業もビジネスもないところだから、宿泊者は全て観光客ということになる。しかし「抵抗」以上に決定的だったのは、タオルミーナまでは標高差が200メートル以上あり、キャリアを引っ張りながら登る気にはなれなかったのだ。

安易な選択としてほとんど水平に繋がる海岸リゾートへ足を踏み入れた。まず取っかかりのところまでカフェに看板が出されていたペンション。しかし部屋を見ようとすると —— それはできない。



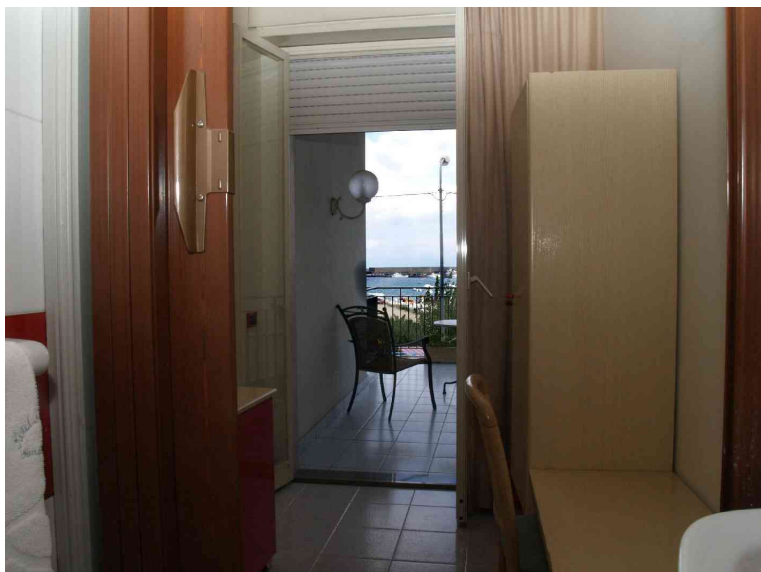
カルタジローネを出て間もなく、夕景を探しながら歩いたとき見た景色を再見、懐かしいものとして眺めた。遠景にはエトナ山。



カルタジローネ出発以来、エトナ山を中心とした円弧状を走るのに、中々すっきりした姿を見ることができない。写真はタオルミーナにだいぶ近付き、真東から見たもの。

宿泊が決まれば、数百メートル離れたそこから迎えの車が来る —— との説明に、やめにした。ホテルはいくつでもある。

ところがこのような思惑が外れたのは、地図通り存在してもシーズンオフのリゾートホテルはほとんどが休業や改装で利用できないことだ。営業しているところから高級ホテルと安宿を忌避すると、残りはさっぱりで、半時間歩いてようやく二軒目に出会う始末だ。しかもこのホテルは値段が40€(5,787円)と安くはないのに、部屋からの眺めは狭い路地を隔てた隣家の暗鬱な壁が全てと、まるでリゾートらしくないものだった。



部屋からテラスと海を眺める。

こうなると —— タオルミーナにするべきであったか？ —— の気持ちも湧き上がるが、正反対の方向に歩いてきただけに、今更逆戻りは業腹だ。半ばヤケクソで前進を続け、駅から一時間、細長く延びるリゾートも流石に終わるかという辺りになって三軒のホテルが見えた。

先端にあるパノラミックホテルは休業。手前は四つ星で **Sporting Baia** の名前も好みではない。残る一つに望みを託し、フロントを訪れた。怖い顔をしたオバサンがカウンターの中に佇んでいる。

しかし声を掛けると気さくな笑顔が浮かび、部屋はあるという。一泊朝食付き50€(7,234円)で二階の部屋は、ダブルベッドが置かれ、広さに

不満はなくテラスからは海もタオルミーナも見える。どうやら頑張った甲斐もあったようだと思え、此処に二泊を決めた。念のためもう少し眺めの良さそうな中央部か三階のところに位置する部屋を尋ねたが、空いていないとのことだった。

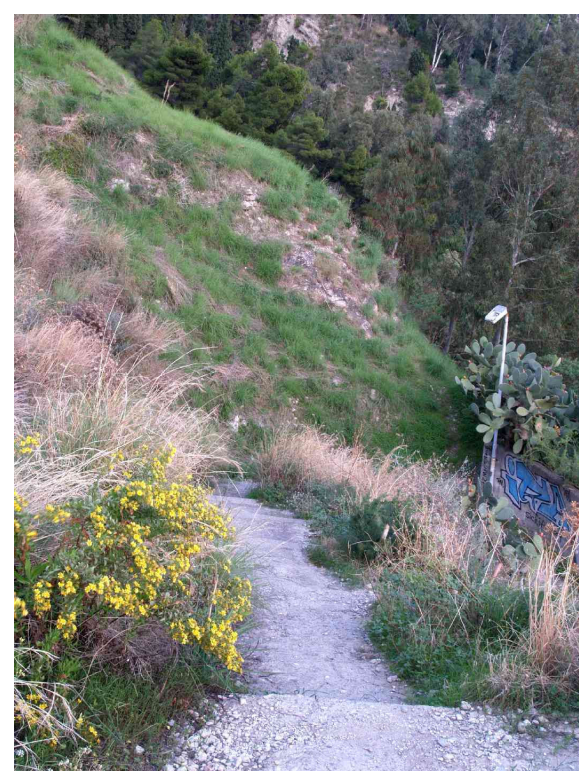
駅からの一時間は肉体的よりも精神的に疲労し、部屋でしばし休息する。トイレに入って用を足しながら設備を観察したところ、ビデがない。シチリアに来てから泊まった宿は、どこも備えていたから、こちらでは必須のものかと思いはじめていたけれど、違うらしい。

テラスに出て数枚写真を撮る。忌々しいのが目の前を横切る電線で、これを回避できないかと三階の部屋などを尋ねたのだが、出来上がった写真を見ても、邪魔なことは歴然だ。

一息ついたところで食事を摂りに、タオルミーナを目指す。交通機関もあるらしいが、初日だし時刻も早いので、海を見ながらのんびり歩くことにした。



テラスからタオルミーナ。右側のとがった岩山の左側麓あたりにギリシャ劇場がある。



タオルミーナへ登る歩道。



遊歩道の上部から。眼下にタオルミーナ・ジャルディーニ駅。その向こう、浜が弧を描き岬状に突き出す根本辺りに宿がある。

タオルミーナ

タオルミーナ・ジャルディーニ駅までやはり一時間掛かった。しかし同じ時間でも、先程の荷物を引っ張りながら当てもなく宿を探しているのと、軽快な装備で辺りを見物しながら歩くのでは、長さの感じ(質)がまるで違う。

海沿いの遊歩道を楽しみ、駅の少し手前から幹線道路を歩かされ、駅を過ぎて200メートルほどのところから登りの遊歩道が始まる。勾配はかなり急で、意外だったのは整備状態の悪さだ。コンクリート舗装され街灯も立っているものの、どちらも長年放置されているらしく傷みが目立つ。しかし少し考えれば納得の行く話で、タオルミーナ観光をしようという人で、わざわざジャルディーニ・ナクソスに泊まるのは例外なのだろう。

ともかく20分ほど掛けて遊歩道を登った。終点近くなるとタオルミーナの周辺部として、道の状態も良くなり、リゾートホテルが点在する。そんな地帯をすぐ抜けると、人家が密集し路地は石畳に替わる。

突然街の中心部に迷い込んだような気分になる。日本家屋でたとえれば、玄関や勝手口からではなく、縁側からいきなり踏み込んでしまったような感じだ。市街平面図は持っているものの、現在位置が図上のどこに当たるのか把握できない。しかしごく狭いところだし、目指す当てもないから、雰囲気のある路地を彷徨うことを楽しんだ。

何回か路地を曲がってゆくと、目の前に数軒のレストランがある。2時近くなり空腹を意識しだしたところだから、一軒のテラス席に吸い寄せられるように坐ってしまった。すぐにオーナー風のオヤジがメニュー片手に現れる。大観光地だから英語を喋るし、メニューは伊英独の三カ国語併記だ。

第一皿としてリングイーネ(平打ちの細長パスタ)にエビ、マッシュルーム、トマト、ウイキョウを和えたパスタ、第二皿は魚のフィレ・シチリア風にし、ホウレン草の炒め物を加え、飲み物はハウスインのデカンタ小と、ミネラルウォーター(炭酸)の500cc壺。



上:レストラン Gambero Rosso のテラス席。下:リングイーネ海の幸・山の幸(?)。



魚のフィレ・シチリア風。

先客は英語圏から来た十人ほどのグループで、屋内に席を占めて陽気に騒いでいた。路上の席に坐るのはモンレアレ以来久々で、思い出したのは下が水平でないとしり心地が悪いということだった。

路地を半分占拠して客席にしているの、脇を次々人が通るが、ほとんど観光客ばかりで、たまに違えば近所にある店の人間だ。出された料理は充分楽しめるものであったけれど、店全体の雰囲気ということになると微妙に好みとは異なる。ロケーションを含め、あまりに観光的ということであろうか。

一例を挙げる。これまでパスタに振りかける粉チーズは容器にティースプーンを添えて供され、好みの量を使用できたり、食べている途中で追加することもできた。この店では粉チーズを頼むと、オヤジが持ってきて振りかけ、そして持って帰る。客の手間を省くサービスかもしれないが、一定量以上消費させない世知辛さでもある。

一事が万事で、常連客が自分の家のように寛いで過ごすのではなく、一回限りの行きずり客が、しばし食事を摂っては去って行くところなのだろう。それも仕方ないし、不愉快な思いをしたわけではない。

一時間弱で食事を終え、勘定は席料1.5€(217円)、パスタ13€(1,881円)、魚のフィレ・シチリア風16€(2,315円)、ミネラルウォーター(炭酸)1.6€(231円)、ワイン500cc5€(723円)、カプチーノ2.5€(362円)、と全体に高めだった。

ギリシャ劇場とシチリアの荷馬車

食後の昼寝は楽しみたいが、宿まで歩けば一時間半掛かる。諦めてタオルミーナ見物を続行した。食堂から緩やかな階段を登って20メートルほどで幅5メートルほどの通りにぶつかる。歩行者専用でこの街のメインストリート、ウンベルト大通りであった。

タオルミーナはショッピングの場所としても有名な。確かにショーウィンドーを眺め歩くと、パレルモやシラクサより洗練されているように思われる。しかしそれも逆に考えると、一般の買い物客はほとんど訪れず、観光客だけを相手に商売をしているためともいえそうだ。日常とはかけ離れている。

ともかくショッピングに興味は薄いので、通り一遍に眺めながら通りを北東へ向かった。200メートルほどで街の正面玄関ともいえるメッシーナ門に達する。一般車両の通行はこの外までで、駐車場やバス停も外にある。いきおいほとんどの観光客はこの門をくぐって来る。



ウンベルト大通りの骨董屋。

門外へ出てみた。家々の間隔が広がり、あいだから北へ延びる海岸線が見える。所々に民宿風の建物や古風なホテルを見掛けるが、営業しているのかは判らない。

一応タオルミーナの感覚的概要が掴めたような気分になり、観光スポットを訪れることにした。まず手始めにギリシャ劇場だ。推定ではB.C.3に建造されたもので、街に隣接しているながら、背景にジャルディーニ・ナクソスの海岸線とさらに遠くエトナ山を望む、絶好のロケーションにある。

この素晴らしい位置は天与のもののみならず、実現するために少なくとも十万立方メートルの石灰岩を掘削したらしい。動力を用いずにこれだけの作業を成し遂げたのは驚くべきことで、古代タオルミーナの繁栄ぶりが偲ばれる。

入場料6€(868円)を支払い中へ入った。券売所付近では人の多さを感じたが、すぐに閑散とした状態になる。それもそのはずで、観客収容数5,400人だから、数十人がうろうろしても、いないに等しいことになる。見物人はそれぞれの興味に応じて移動し、舞台に立って間近に背景の円柱を見上げる人もあれば、中段の観客席に腰を下ろしあたかもこれから始まる劇を待ち受けるかのようにしていたり、最上段の円形通路を廻り舞台の見えようが変化する様を確かめる人など、多種多様だった。

最上段から見物グループに混じり劇場が借景としている後背の雄大な風景を眺めた。生憎なことにエトナ山は雲に隠れていたけれど、それでも



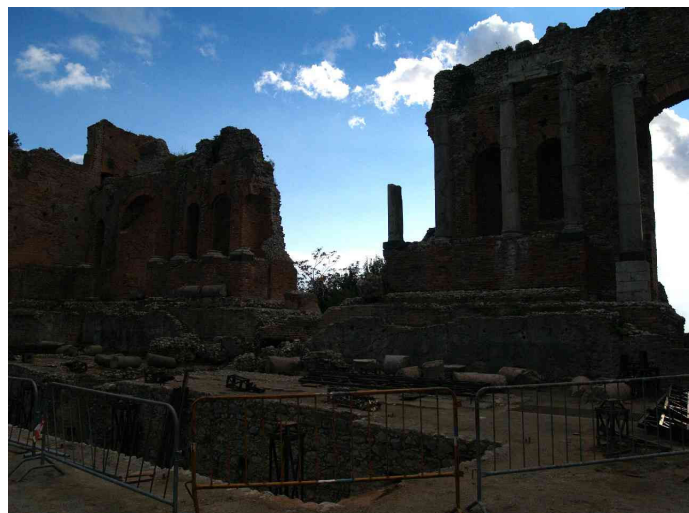
タオルミーナから北へ延びる海岸線。

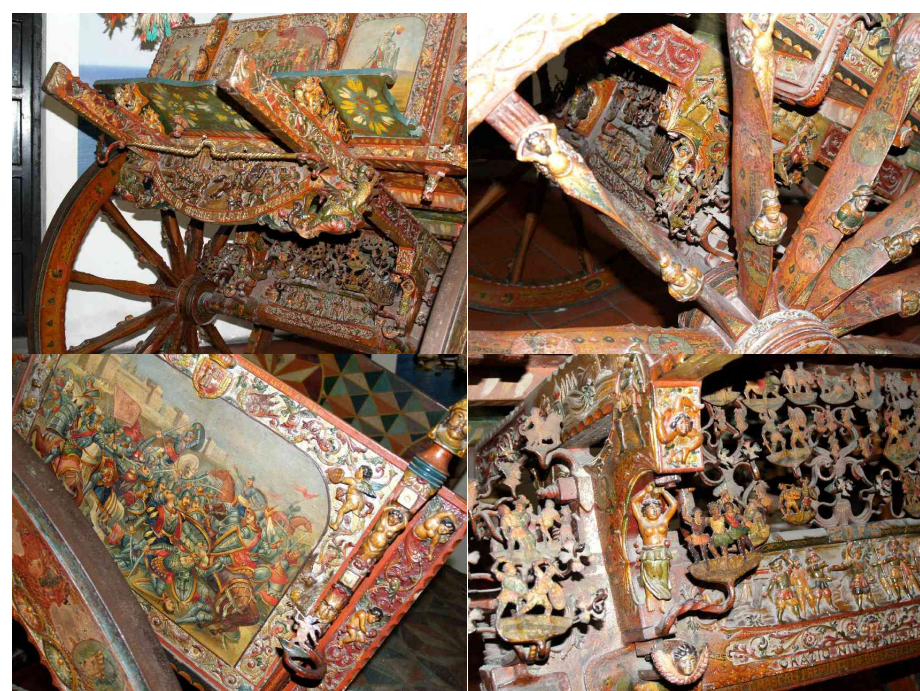


ギリシャ劇場からジャルディーニ・ナクソスの海岸線を望む。

なお素晴らしい景観を堪能する。

「芸術と歴史の島 シチリア」によれば現在でも音響効果は素晴らしく、夏になると演劇やコンサートが盛んに開催されるらしい。実際にそれを目の当たりにすることはないと思いつつも、想像するだけでも充分楽しめるのだ。





アンティーク裝飾荷馬車。

ギリシャ劇場を出てウンベルト大通へ戻り、先程は見落としていた観光案内所に気付いて、様子を見に寄る。古い建物のホールを利用し、面積は二十坪くらいか。正面にカウンターがあり年配の婦人が待ちかまえていた。

市街平面図は既に入手済みのものと同じであったので、これはパスし、ホテルリストを貰った。こちらに

宿を替えるつもりはないものの、等級や価格の概況に興味があったためだ。結果をいえば五つ星ホテルが三軒、四つ星ホテルが十四軒、三～一星が四十軒と、質量共に圧倒的であった。

リストを入手して立ち去ろうとしたとき、部屋の片隅に置かれた荷馬車が容易ならざる物と気付いた。シチリアの荷馬車に関する解説を「芸術と歴史の島 シチリア」から引用する。

極彩色で飾られたシチリア独自の荷馬車は、仕事で使う実用目的で誕生したものだ。その歴史は比較的浅く、19世紀初頭にブルボン家が整備した車道の上を、荷を乗せて走るようになって一般に普及した。

—— 中略 ——

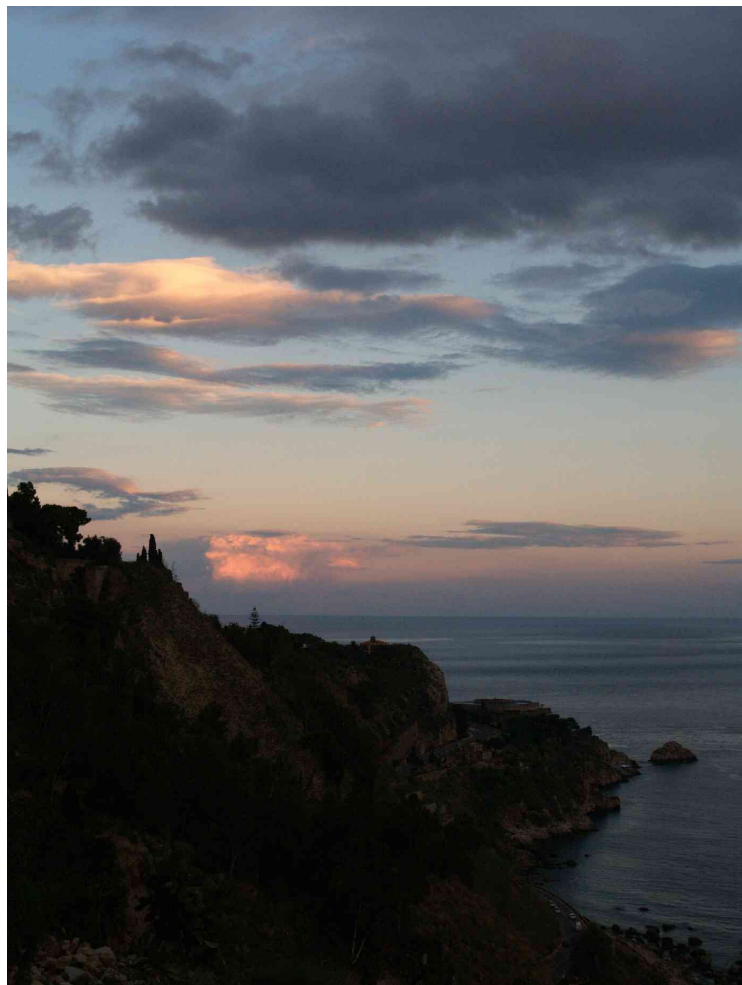
荷馬車の制作は時間のかかる複雑な工程を必要とし、何人もの職人が携わった。丈夫な木材(部分によって材質は多少異なる)で荷馬車が組み立てられると、彫刻師が装飾や、車輪など目立たないけれども重要な部分にノミをふるった。鍛冶屋が車軸や装飾帯を仕上げた後、最後に登場するのが絵師で、荷台の横板などに派手な目立つ色を使って荷車を仕上げた。

—— 後略 ——

この類の荷馬車らしい。改めて案内所の彼女に確かめると、アンティークを展示していると教えてくれた。細工の細密さや芸術性は日本の山車が優るかもしれないが、儀式専用と実用目的でその発祥も使用状況も全く異なる。まさに「シチリア独特」としかいいようのないものであろう。

案内所を出てタオルミーナを彷徨ったが、何しろ面積にすれば0.2平方キロしかないのだから、しばらく歩いているとそれにも倦んで帰ることになった。時刻も4時半となり黄昏始めていた。

来たときと同じ遊歩道を下り、海辺の遊歩道を行くと車道の向こう側にインターネットカフェがある。生憎パスポートを宿のフロントに預けたままであつ



遊歩道を下りながら、タオルミーナ岬方面(南東)を眺める。

だが、宿までは半時間弱の道のりだ。一応念のために尋ねてみると、やはり何らかの身分証明書がないと駄目だった。

宿へ戻ってパスポートを受け取り、ついでにトイレも済ませて出直す。件のインターネットカフェまでに他のアクセスポイントがあったものの、一軒はゲームセンターのようなところで、訳のわからない若い連中がたむろしていたため敬遠、もう一軒は満員だった。

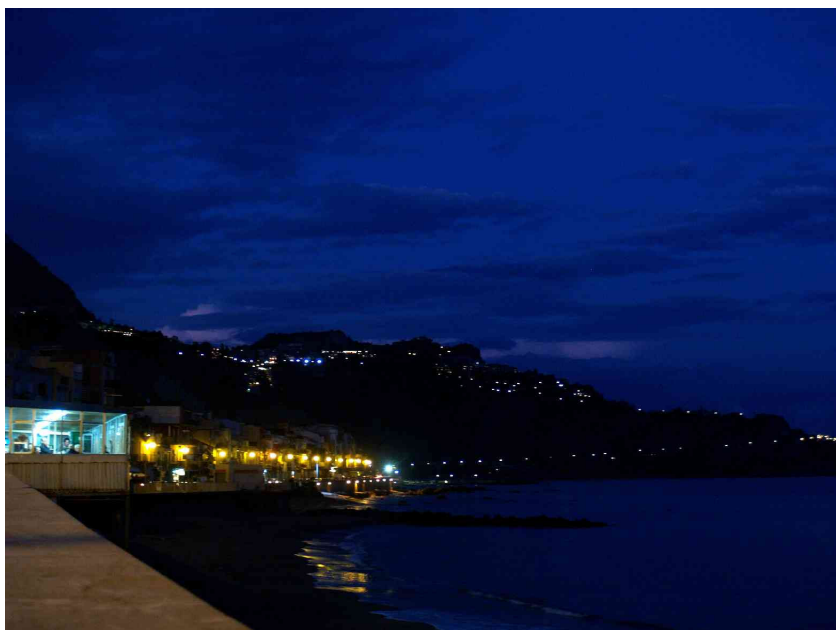
往復一時間ほどを費やしたアクセスだが、収穫らしいものはなかった。料金は15分0.5€(72円)。宿への帰り道、食料品店によりミネラルウォーター2ℓ0.7€(101円)、ミネラルウォーター(炭酸)1.5ℓ0.7€(101円)、オリーブ250/560g 1.7€(246円)、ヨーグルト500g 1.7€(246円)など。

中距離バス

せっかく広々したテラスがついているから、夜中にも何回か出ではタオルミーナ方面を眺めたり、上天を仰いだりした。雲は多いものの概ね晴れが続いている。夜明けが近くなり、朝焼けが期待できそうと見極めがつくと外出した。テラスからでは撮影するのに障害物が多すぎる。

薄暗いロビーでは音を消したTVが映り、若い男がこちらへ視線を廻した。夜警兼夜間フロント係らしい。肯いてそのまま玄関口に行くと、自動ドアは作動中だった。

無人の砂浜を彷徨って適当な場所を探す。その間にも刻々暁光は明るさを増し、雲の流れと絡み合って多彩な光景を見せてくれる。時々カメラを固定してスローシャッターを切る。浜辺に置かれたベンチなどをこれに利用するときも、持参の粘土が役立ってくれた。



宿近くの海岸防波堤から見るタオルミーナ。



九枚目を撮影したときには朝焼けも淡いものに替わり、旭日は見えないものと諦めた。部屋に戻り、「芸術と歴史の島 シチリア」を開くと、タオルミーナの見所をチェックしながら、市街平面図にマークを付けた。



イタリアのゴミ収集システム。機械力を使い大型収集容器を取り込む。

9時になって出掛ける。一時間半歩くことも苦痛ではないが、交通機関を利用する場合を調査しようと、フロントにいた二十代の女性に訊いてみた。幹線道路に出て、タオルミーナ方向へ100メートルほど行くとバス停があり、9時20分発とのことだ。まさに渡りに船とはこのことか。

念のため市街平面図に宿とバス停の位置をマークして貰って出掛けた。予想通り10分で到着したバス停には既に五、六人が待っている。二人はいかにも地元のバアサンだけれど、残りは観光客らしい。定刻にやってきたバスには、さらに多くの観光客が乗っていた。運転手が発券機を操作し1.3€(188円)のチケットを渡してくれる。パレルモ市内バスのように定額運賃の場合は、あらかじめタバクレーアなどで調達しておかなければならないのに較べれば、旅行者にとっては有り難いシステムといえよう。

バスは幹線道路を外れ、ジャルデーニ・ナクソスの真ん中辺にあるバス停に寄り、次の停車はタオルミーナ・ジャルデーニ駅だった。明日の朝、旅立つときには利用できると認識する。

駅でバアサンが降車し、バックパッカーの若者が乗車する。駅前を発車すると、遊歩道の分岐点などを一気に通り過ぎ、タオルミーナの丘を大きく迂回して北のマゼオから葛籠折れの坂道をぐんぐん登りだした。視界が急速に広がる。タオルミーナの市街が上方に垣間見えた辺りにバスターミナルがあり、此处が終点だった。

バスの時刻表があったので入手する。ジャルデーニ・ナクソスに二カ所と駅前に停留所があり、半時間に一本の運行がある。遊歩道利用者がいないのは当たり前か。ちなみにシチリア各地から長距離バスが乗り入れ、カターニャからの路線もある。カルタジローネからの列車をバスに乗り換えていけば、必然的にタオルミーナに泊まっていたであろう。しかしジャルデーニ・ナクソスに泊まっていることは、不便でありながらも後悔はしていない。タオルミーナは過剰に観光的で、滞在してみたい気持ちになれないのだ。

バスターミナルから市街への道は判らなかつたが、観光客風の人波に付いて坂道を登ると、間もなくメッシーナ門が見えてきた。

門内に入り、平面図に付けたマークを中心に市街を見て回る。昨日歩いたところがほとんどにもかかわらず、東からの直射日光を受けているために、一段と輝いて見える。どこもかしこも観光客ばかりで、日本人の姿も多い。エリアが極狭く、ショッピングの対象が多いためか、二、三人のグループで徘徊していた。

日本人以外の団体も多く、グループの目印に旗の替わりとして丸に数字を書いたプラカードを使用しているのが面白かった。



左上: 区、アプリーレ広場。右側の鐘楼はサン・ジュゼッペ教会。右上: 街灯の支柱。この趣味は？ 左下: ドゥオーモ正面の噴水。17世紀バロックで、頂部は市章にもなっているケンタウロス。右下: 団体観光客。



カタリーニャ門。



バディア・ヴェッキア(旧大修道院)

水道量水機の蓋でも凝った細工。



岩山への徑。始まりは階段だ。

市街一巡を終わり、西側に聳える岩山に登ることにした。宿のテラスからも眺められるこの岩山は、市街との標高差およそ200メートルで、平面図によれば頂上にサラセノ城趾なる遺跡もある。遺跡はともかく、この頂上から、街とギリシャ劇場がどのように見えるかに期待した。

階段で始まった遊歩道はほどなくコンクリート舗装された坂道になる。葛籠折れの折れ曲がり地点など、場所を選んで宗教的なモチーフのオブジェが置かれている。台座にタイトルも刻まれているが、興味が湧かず写真だけ撮って通り過ぎた。

高度は気持ち良く上がり、樹木などで遮られることも少ないため景観を楽しみながら登ることができる。20℃近い気温と、強い日射しのため暑いのが難だけれど、海から吹くそよ風の心地よさも際だつ。汗をかかないスピードで歩いた。

途中カップルを一組追い越した以外は全く人に会わない。千人を超すであろう観光客のいる地帯から直線距離にすれば二、三百メートルとは信じられないような静けさだ。

遊歩道を登り詰めたところにカプチーニ教会があった。

教会の裏手には自動車道路がカステルモーラの方へ続き、それから分岐してサラセノ城趾に繋がる遊歩道がある。しかし100メートルほど登ったところにゲートがあり、閉ざされていた。仕方なく



左上:遊歩道からジャルデーニ・ナクソス方面。上中～下左:遊歩道の途中に置かれたオブジェ。下中:北西にあるカステルモーラ集落。下右:ギリシャ劇場遠望。



IX. アプリーレ広場。三角帽子のような尖塔とその右側の赤い屋根はサン・ジュゼッペ教会。ほぼ画面中央に四角い時計塔。

街の方へ引き返すと、下から登ってきた中年夫婦と出会った。城趾を目指している観光客ならば、100メートルにせよ無駄足は気の毒と思い、ゲートが閉ざされていることを告ると、女性の方が —— 私たちは散歩で良くこの辺りを歩く。



遊歩道を下りつつ見上げたサラセノ城趾。行くことが出来なかった故に、あそこからの眺めが絶景のような気がする。

あのゲートは閉まっていることも度々.... —— と逆に教えてくれた。

下る途中、IX. アプリーレ広場を中心とした一帯が良く見えるところがあった。昼飯に適当なテラス席を求めて、単眼鏡で仔細に探してみたところ、二、三カ所それらしき候補はあったが、意外に少ない。候補となったところも10時半現在では無人で、時分どきになれば営業するのかは不明なのだった。

市街地へ戻ったものの、11時ちょっと前では行くところとしてギリシャ劇場しか思い付かない。上から見たからといって何の発見もなかったけれど、東からの光線と昨日よりも晴れ上がっていることで、多少はましな写真を期待していた。

6€(868円)を払い再び入場する。昨日に較べれば幾分



ギリシャ劇場。舞台奥の方から観客席の眺め。

見物人が少ないように思われる。先程登った岩山が、対称的にどのように見えるのか興味があり、まずその位置へ行ってみた。



先程訪れたカプチーニ教会(左肩回り)と、行き着けなかったサラセノ城趾を見上げる。



カプチーニ教会とサラセノ城跡を撮影してからは、観客席上部を辿って舞台の見え方を比較する。やはりなんといっても正面付近から眺める、イオニア海とジャルデーニ・ナクソス、そして雲に隠れていなければ見えるはずのエトナ山が素晴らしい。

しかしこれは現在、舞台背景部分が崩れ落ちているから見えるのであって、往時の復元図をからすると、エトナ山の頂部さえ背景に遮られていたようだ。(当時としては) 超大規模な土木工事を敢行して、なおこの位置に劇場建設した理由が判らなくなる。

舞台面では6人ほどの男が、アングルの鋼材で組み立てられた梁を運んだり、忙しげに働いている。作業服は着用していないし、作業の内容からしても、修復工事の類ではない。コンサートやその他イベントの仕込みであろうか。

しかし興味もそこまでで、もう一步踏み込み、イベントの内容を確かめたり、場合によっては見届けるほどの熱意はなかった。結局20分ほどの滞在で、ギリシャ劇場をあとにした。

IX. アプリーレ広場へ行き、カフェでカプチーノを飲みながら一休みする。ちなみに岩山の教会も同じ cappuccino(i)だが、あちらが語源で「カッパッチン派修道僧が着る茶色のフード付きコート「カッパッチョ」の色に似ている所からそう呼ばれ」(出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』) ているそうだ。

休憩しながら昼飯について考える。同じ店を繰り返し利用するのは、半ば習性であり、シチリアでも再三このパターンであった。そのようなことで昨日の店 *Gambero Rosso* を当初は考えていた。しかしこの好天気と爽やかに広がる海原を目にしたあと、あの路地裏はあまりにもくすんで感じられるし、それを補う料理の質やサービスの良さもなかった。

時刻は12時10分前。気に入った店を探すのに、十分な時間を使えるだろう。



IX. アプリーレ広場のカフェ。



サン・ドメニコ・パレス・ホテルの裏口。

レストラン・グランドウーカ

探索を始めたときは、安易に考えていた。しかし通りすがりに一瞥したときは良さそうに感じられたところでも —— 此处で本当に満足できるか？ —— 見直すと、大抵は「帯に短したすきに長し」みたいなことになる。

「景色の良い」ことを条件にしたのも問題を難しくした。建物が密集しているウンベルト通りで、店の入り口からは奥が見晴らしよい状態になっているか、確かめることができないのだ。

何時しか中心部を外れ、サン・ドメニコ・パレス・ホテルの裏口に出た。この高名なホテルであれば、眺望はともかく、料理は十分な品質を期待できる。

しかし全く入る気になれなかったのは、日本からの団体客に遭遇する可能性も非常に高いと感じたためだ。ちなみに、かつて母も団体旅行でこのホテルに宿泊している。

徘徊を続けるうちにIX. アプリーレ広場へ戻ってしまった。広場の南側には日除けパラソルをセットしたテーブルが並び、眺望も雰囲気も申し分ない。しかしテーブルに置かれたメニューを見ると、飲み物ばかりで食べ物はスナック程度が数種類だ。

成果の上がらぬままでも、時刻は確実に進行し1時になろうとしている。弱気になって —— 昨日と同じ店でも —— の考えも湧き上がるが、時計門とカタールニャ門の間辺りにあるレストラン・グランドウーカが気になり、もう一度チェックにいった。

写真入り看板に眺望の良さをうたいながら、いざ入ろうとしたところ階段が地下に通じていたため —— 写真は別のところの話か？ —— と、一度は敬遠した店だ。改めて階段を下りて確認する。薄暗い地下テーブル席の南側は燦々と陽光を浴び、突き当たりまで行くとそこは地上二階になっていた。南斜面を利用した結果だ。

このテラス席だけで四、五十人は充分入れそうだが、今のところ先客は二組だけだった。好きなテーブルを選ばせてくれるので、中程の南端に坐る。正面にはギリシャ劇場、右手にはイオニア海、後方にはジャルデーニ・ナクソスのパノラマが展開する。

それまでのところタオルミーナに対する感情にはどこか冷え冷えしたものがあった。しかし此处に坐って景色を眺めるだけでそのようなものは氷解し、暖かい思いに取って替わる。ボーイ達の印象も良かった。一人はカタコトながら日本語を話す。海外で日本語を口にする連中に会うと、胡乱な気配に身構えてしまうことが多いけれど、彼の場合は純粋に日本人を歓迎しようとする心情が滲む。



グランドウーカのテラス席。中央に遠望されるのがギリシャ劇場。



カラスミ(Bottarga: ボラの卵の塩漬け)スパゲッティ。

流石に日本語メニューはなかったものの、伊英独の三カ国語で表記されたのがあり、カラスミスパゲッティとグランドゥーカ風海鮮揚げ物にワインをデカンターのピッコロで注文した。

料理を待つあいだ、ワインを飲みながらじっくりテラスの設えを観察する。予想以上に気合いの入った作りだ。外周は鉄骨で組まれ、テーブルの高さまで厚いガラスがはめ込まれている。その外側に上下にスライドする厚ガラス窓が、現在は開放状態で置かれ、雨風(酷暑、酷暑?)を避けるときはこれを引き上げればよい。天井も同じ厚板ガラスで覆われ、スライドする遮光幕がセットされ、これを広げれば完璧に日射しを和らげることができる。

パレルモのテラス席(P.11)は、晴天無風の時は快適であったものの、降り出すと雨を除け、最後には撤退を余儀なくされた。此処ならば全く動く必要もなく、烈風が吹くようになって、ボーイが窓を閉めればよい。風雨太陽がどのような状態になってもビクともしないのだ。

料理に特筆すべきことはなかったけれど、十分に旨かったし、心地よいそよ風に吹かれながら、ギリシャ劇場や海原に視線を巡らせながら食べていけば、至福の時ともいえる。揚げ物はカラッとしていたし、ワカサギ風の小魚もツマミに好適。

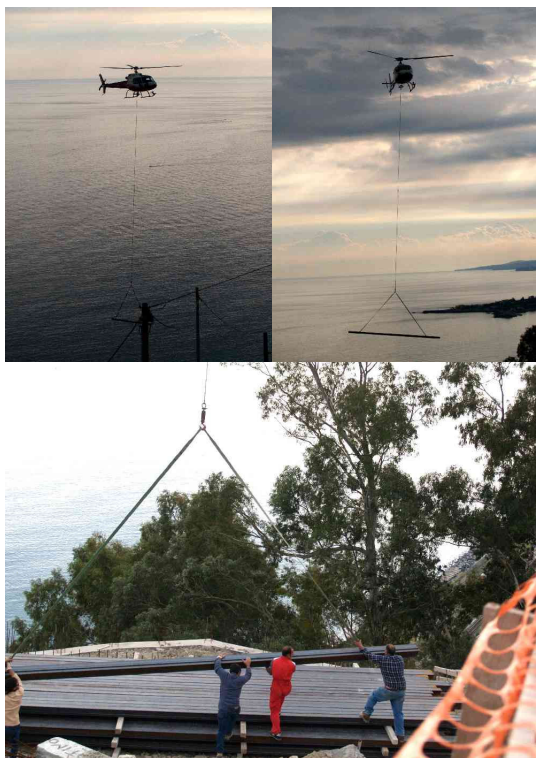
一時間の食事をカプチーノで仕上げ、勘定は、席料2€(289円)、カラスミスパゲッティ10.5€(1,519円)、海鮮揚げ物13€(1,881円)、ワイン5.5€(796円)、ミネラルウォーター(炭酸)1.5€(217円)、カプチーノ2€(289円)だった。



グランドゥーカ風海鮮揚げ物。

すっかり優雅な気分になってグランドゥーカを出す。見たり寄ったりしたい場所もなく、宿へ帰ることにした。来たときのようにバスを利用する手もあったけれど、せっかくの優雅な気分「乗合自動車」は無粋だ。歩くことは苦にならないので、遊歩道をのんびり酔いを発散させながら歩いた。

途中に(多分)ホテルの建設現場がある。此処に長さ10メートルほどの鋼材を運び上げるのにヘリコプターを使用していた。現場まで幅の狭い道路しか通じておらず、コンクリートならば小型のミキサ一車で運ぶのであろうが、長尺の鋼材となると道幅以上に屈曲の激しさを運搬不能だ。短く切り刻むよりもヘリコプター使用が安価になるのであろう。しかし今まだかつて未見の光景なので、興味深く観察しながら坂を下った。



ヘリコプターによる鋼材運搬。



便座クリーナーが用意されているのは良いサービスだと思う。向こうの公衆トイレは便器に直接坐るだけになおさらだ。

手洗いの水栓にノブがなく、自動かと思っただがセンサーもない。良く見ると足下にペダルがあり、これを踏むと無事水が出た。

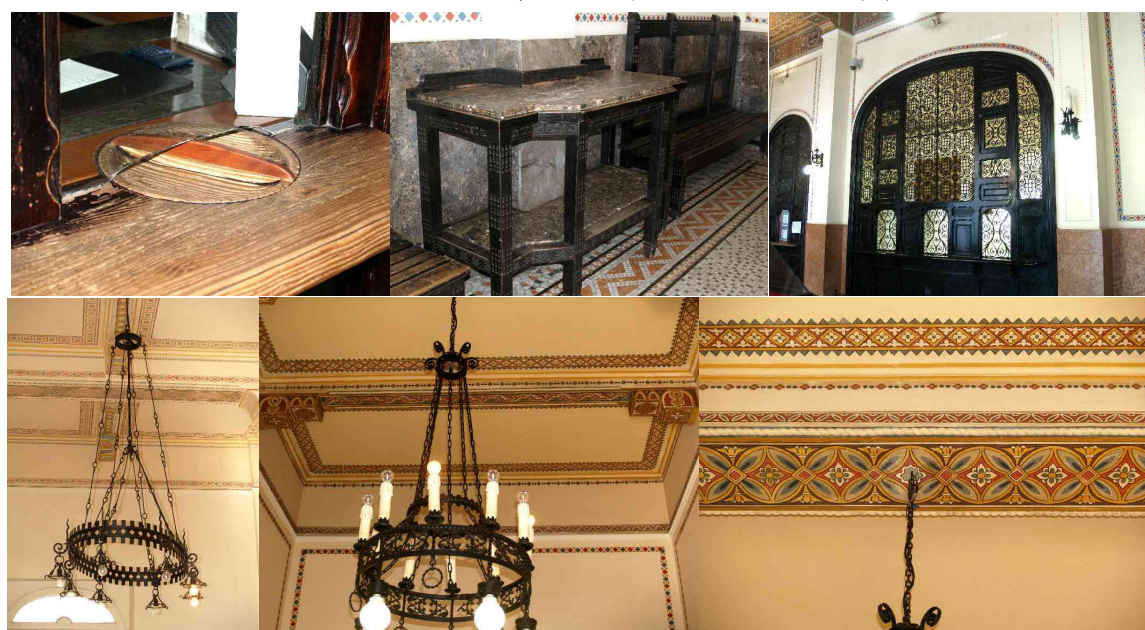
下りきったところで尿意を覚える。目と鼻の先が駅なので、イタリア鉄道公衆トイレ事情を視察がてら、用を足した。

すっかり馴染んだ海沿いの遊歩道をとぼとぼ歩く。いつの間にか雲が増え、日は陰ってしまったが、そのことが風景全体の印象を柔らかいものにする。遠く宿の前辺りの海で、6、7 隻のカヌーが行き交っていた。タオルミーナともこれでお別れかと思うと、淡い感傷が湧き上がる。

宿の格付けと料金

11月10日も晴天が続いていた。9時に宿を出発し、昨日と同じバスで駅まで行く。メッシーナまで9時56分発の *ICplus* で行くつもりだ。9時半に駅で切符5.23€(757円)を買ってしまうとすることがなくなり、到着したときは気ぜわしく立ち去ってしまったため、ほとんど見る事がなかった駅舎をじっくり眺めた。

古色を帯びているとの第一印象はあったが、つぶさに見て行けば予想を遙かに上回る重厚さだ。待合室に置かれたテーブルは、木部に繊細な彫刻が施され、天板と下部の荷物置きには、壁



上左: 出札窓口。上中: 待合室。上右: コンコース側窓口。下: 天井の照明と模様。

と同じ花崗岩の板が使用されている。それも柱の形状に合わせた特注品だ。ベンチもこのテーブルとセットで作られたらしく、同じパターン of 彫刻が見える。コンコースと出札事務室の仕切りも、鉄板を加工して複雑なパターンを、飾りガラスに組み合わせている。照明は豪華とはいえないにしてもシャンデリアを使用し、天井に施されたパターンは塗りと鋳による模様の浮き出しだ。

そのほか開め切られていたため直接目にはできなかったけれど、駅舎平面図によれば「一等待合室」もある。総合的な印象は「田舎の小さな駅」ではなく「由緒ある名門駅」だ。あれこれ観察に時間を費やすあいだに、シラクサ発、ローマ行きの *ICplus* が堂々たる姿を現した。



ローマ行き *ICplus*。

シラクサ、ローマ・テルミニ間を10時間16分で結ぶこの列車は、これまで利用してきたローカル列車と全く仕様が違っていた。連結されている車両の数が多く、一両当たりも長いし、そしてコンパートメントになっている。先客が一人いた車室に入ると、しばらくしてタオルミーナから一緒に乗った若い男も入ってきた。東南アジアからの留学生風だ。

二人に挨拶する。先客は気さくそうな男で頬笑みながらの挨拶が返ってきた。相対する窓際の席に坐り、景色を眺める合間に、自ずと視線が彼の方に向く。髭に注目した。スタイル自体は特異でないものの、仕上げの細密さに執念さえ感じられる。

ふと —— 写真を撮らせて貰おう —— の考えが浮かぶ。これだけの思い入れがあるならば、その成果に誇りを持っているであろう。英語は駄目であったけれど、カメラと髭を指差すことにより意図は通じ、髭を前面に出してポーズを取ってくれる。頬がゆるんでしまうのは、気分を良くしている表れであろう。

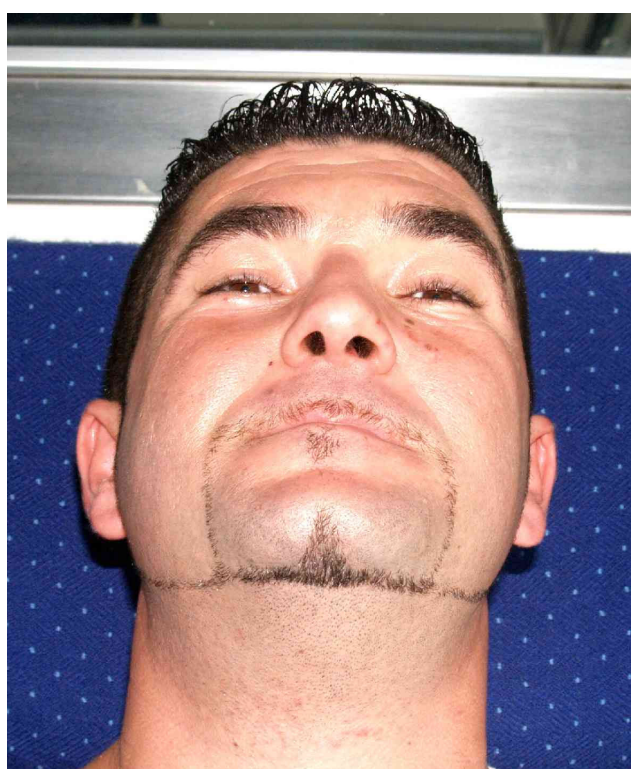
撮った画像をその場で確認できるのがデジタルカメラの有り難いところで、モニターで表示したものを彼に見せ、ついでに留学生にも示した。コンパートメントの雰囲気や和む。裏付けのない感想だが、以後皆が寛いだ気分旅できたように思う。

メッシーナで彼等に別れを告げ下車する。駅から50メートルほどの便利なところにある観光案内所を訪ねた。先客は誰もおらず、女性スタッフが三人、一人だけが英語を喋る。ホテルリストと市街平面図を貰い、お勧めのホテルを訊くと、即座にリストの二つにマークを付け、平面図上で位置を教えてくれた。

どちらも一つ星で、駅に隣接している。安宿も嫌いではないけれど、あまりに安易に決まってしまうことに抵抗があり、老眼鏡を掛けて、リストから独自の候補をさらに二軒選び、平面図上にマークして貰った。

礼を述べて案内所を出る。独自候補の一軒目は幹線道路の交差点にあるので、騒音が危惧された。二軒目を先に見るつもりで平面図を見直すと、観光案内所推薦宿が(道筋の選び方によっては)その通り道にある。これもついでに見ておくことにした。

一軒目は道路から垣間見えるロビーの様子が猥雑に感じられパスする。同じ通りの三軒先にあるツーリングは古めかしい建物の、森閑としたフロントに、オーナーかと思われる七十くらいの老人が佇んでいた。好みのタイプなので、トイレ、シャワー一付の料金を尋ねる。一泊40€(5,787円)だった。



駅前に、30メートルほどの間隔で観光案内所が二つある。下の方の案内所を利用した。



ツーリングの玄関先とフロント。

騒音の心配が少ない裏手と注文を付けて、部屋を見せて貰う。表からの印象通り、設備その他は古いままだけれど、天井の高い清潔な部屋は広々して居心地が良さそうだ。ホテルリストの料金欄に書かれた7€～25€よりは随分高いが、それなりに納得ができた。二泊することにし現金で前払いする。

荷物を部屋に収め、食事と街見物に出掛ける。お勧めレストランとインターネットカフェの所在を訊くために先程の案内所を再訪した。相変わらず利用者のいないまま、三人が所在なさそうに佇んでいる。英語を話す女性に再訪目的を告げ、流れとして、ツーリングに投宿し、料金が40€だったが納得していることなども話した。

彼女の顔に憤然とした表情が浮かび、同僚と何事か話し始めた。要するに —— 一つ星で40€は高すぎる —— ということらしい。受けた方はさらに憤然とした表情になり、矢庭に受話器を取るとダイヤルし始めた。

ツーリングのフロントと話をしているものと想像しつつ、成り行きを見守る。話しながら彼女の顔は陰しさを増して行く。思ったよりも長い会話が終わり、通訳を介して判ったことは、ホテル側の主張する —— トイレ、シャワー付のシングルはなく、ツインとして正規の料金を請求した —— に押し切られたこと、しかし依然として高すぎると思っていることなどだ。

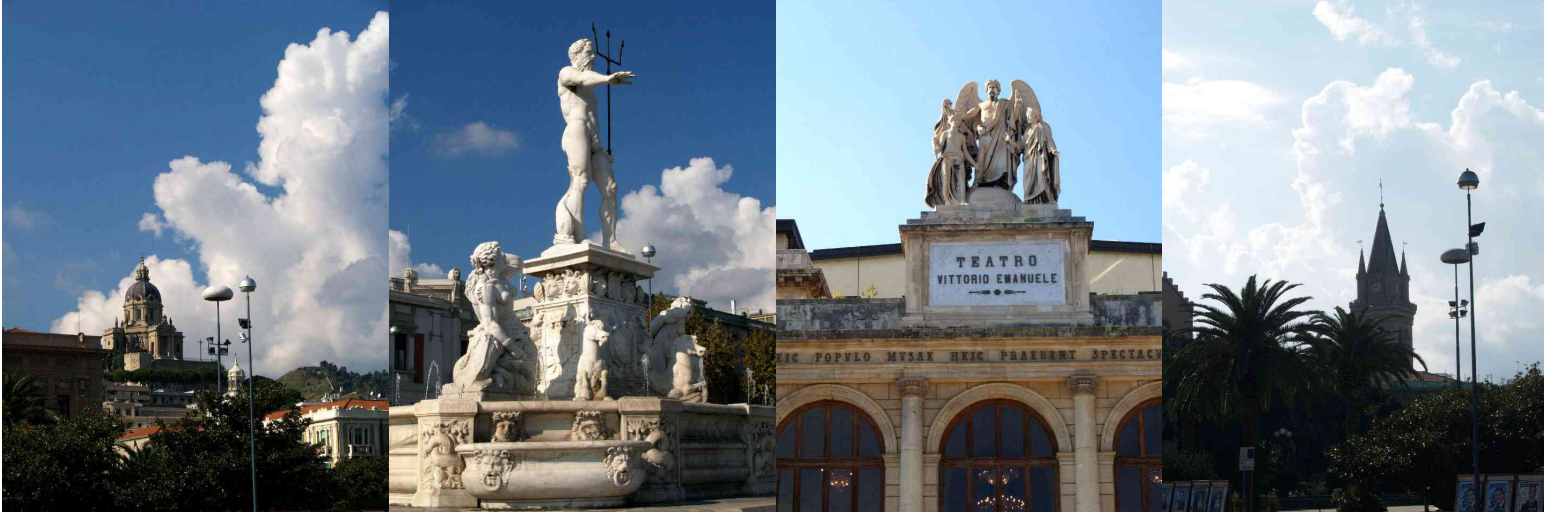
料金値下げは当初から期待していなかったもので、この話は打ち切りとし、レストランとインターネットカフェの所在をマークして貰い案内所を出る。どちらも港の中程に隣接していたので、港見物をしながらそちらへ向かった。

間違いなくマークされた地点に到達したものの、レストラン、ネットカフェ共にない。さらにその近辺を半時間ほど費やし、虱潰しに調べてみたが無駄だった。カフェについては後刻、もう一つの観光案内所に聞いて判ったのは、マークされた地点から50メートルほど離れた別の通りに面していることだった。

女性三人の案内所に関し、駄目なのは —— やる気はあるものの、成果に結びつけることができず、結果的に役立たずである —— ことだ。ホテル料金に関しても、電話を掛けた結果は、料金はそのまま人間関係を悪くしただけだ。ともかくそれ以降はもう一つの案内所を利用することにした。



メッシーナ港。



上左：12世紀に着工したサンティッシマ・アンヌツィアータ・デイ・カタラーニ教会。上中：港の対岸の円柱上に「手紙の聖母」像。上右：港沿いを走る路面電車。下左：丘の上にクリスト・レ教会。下中左：ネプチューン噴水。下中右：ビットリオ・エマニュエル劇場。下右：大聖堂の鐘楼。

レストランは見付からなかったけれど、平面図に食堂マークが多数見受けられる駅周辺に戻る気にもならなかった。時刻が早かったことと、街見物を続けていれば、そのうち食堂も自ずと見付かるであろう。簡単に考えて港沿いに行く。夏を思わせるような雲が湧き上がり、対岸には手紙の聖母像が陽光を受けて金色に輝く。

食堂があっても意に染まなかったりして歩き続け、ネプチューン噴水に至って、これ以上先には食事場所も見べきモニュメントも存在しないような雰囲気になる。歩いてきた海岸通りと平行するガルバルディ通りを戻った。この通りも、商店やオフィスが並び、バルは散見するものの、食堂は見付からなかった。

ビットリオ・エマニュエル劇場辺りまで戻り、方角を変えることにした。ランドマーク的目標は丘の上に聳えるクリスト・レ教会にした。途中目標が見えなくなっても、ともかく坂を登って行く。半時間ほどで辿り着くことができた。

教会は堅く扉を閉ざしていたけれど、このネオバロック建築は、見物する対象としてあまり価値はない。それよりも教会前の展望台から眺めるパノラマは、期待を裏切らないものであった。

幅5キロほどのメッシーナ海峡を挟んで対峙するイタリア本土。左の方に見える街は、鉄道フェリーが着くサンジョバンニで、右の方にある



クリスト・レ教会の前から見る本土。



サントウアーリオ・マドンナ・ディ・モンタルト教会。

のがレジオディカラビアだろう。メッシーナとこの二つを結ぶ航路上を途切れることなく船が航行して行く。しばし海上の往来を飽きもせず眺めていた。

再び見物と食堂探しを再開する。「来た道を引き返すのは芸がない」というだけの理由で、丘を南へ下った。あとは低い方へ道を選んで行けば港へ出るだろう。立派なファサードと鐘楼を持つサントウアーリオ・マドンナ・ディ・モンタルト教会の前を通るが、此処も扉を閉ざしていた。

半時間ほど彷徨い、気が付くと大聖堂のそばまで下っていた。ようやく一軒のオステリアを発見する。大聖堂前広場の一部といっても良さそうな、幅広の石畳街路を植木鉢で仕切り、大型日除けの下にテーブルが全部で六つセットされている。これ以外に屋内にも六テーブルの食堂だ。



先客が数人いたけれど、雰囲気から常連ばかりらしい。お品書きと違ったものはないので、先客の一人がワインのつまみのようにして食べている海鮮サラダを指差し、さらに白ワインのグラスと、ともかくパスタを頼んだ。



注文してから待たされないのがこの手の食堂の良いところであろう。ワインは即座に、海鮮サラダもストックから皿に盛る程度の時間で到着した。シンプルなサラダでありながら、白ワインに良く合う。材料はトマト、セロリ、タマネギにピンク色をした生の魚だ。多分メカジキだろう。

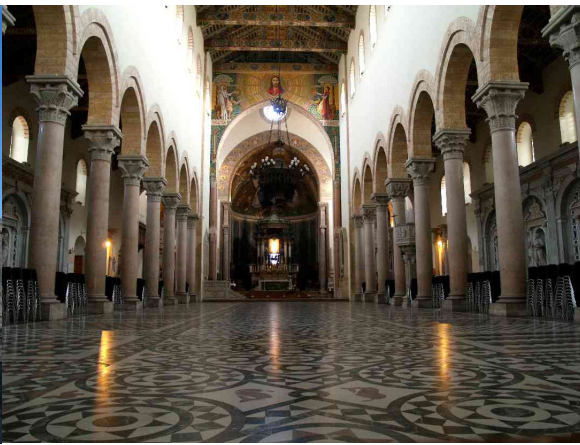
上右：海鮮サラダ。下左：店のお勧めパスタ。下右：削り節を彷彿させるチーズ。

喧噪と無縁の屋外席が与えてくれる心地よさを、ワインとつまみが強化してくれたようで、すっかり寛いだ気分になる。そのうちパスタも登場した。注文するときは話が上手く通じないため —— パスタであればどれでも良い —— みたいな、いささか乱暴な注文であったにもかかわらず、これもまた酒と相性が良く、そして朝から何も食べないできた空腹を満たしてくれた。

大衆食堂の食事を楽しんで、料金は、席料1.5€(217円)、ワイン三杯9€(1,302円)、海鮮サラダ6€(868円)、パスタ6€(868円)だった。店を出る前にトイレを使おうとしたが、明かりが点かない。訊いてみると壊れているとのことだ。勝手の判らぬトイレを真っ暗で使うのは陰呑だ。幸いデイパッ



大聖堂と鐘楼。



大聖堂内部。

クに懐中電灯を持参していたことを思い出し、これを持ち出して用を足す。このような使用法は全く予想もしていなかったけれど、持参したものが役立つのは嬉しい。

食事を終えたのが3時少し前であったので、昼寝をしてから出直すには遅すぎるように感じ、そのまま周辺を廻る。大聖堂の内部は、祈りを捧げる人、観光客のどちらもおらず、そして通常ならば作りつけのベンチがなくて、替わりのパイプ椅子は側廊に積み上げられていた。そのせいか教会とい



大聖堂前広場にある「オリオンの噴水」。16世紀のものだ。

うよりも体育館にでも佇むような気分になる。

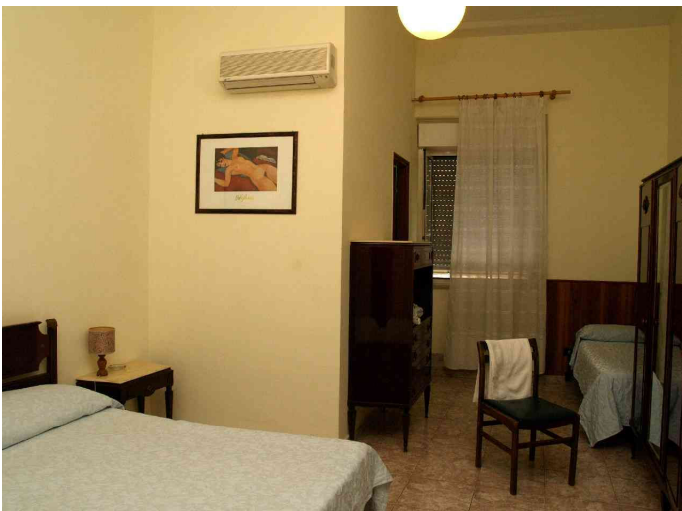
メッシーナは度々地震などの被害を受けた街で、1783年には地震と津波で壊滅、1908年の地震では8万人の犠牲者が出ている。かててくわえて第二次大戦で激しい砲撃を受けたため、由緒ある建物はほとんど残っていない。

同じように第二次大戦で被害を被った都市でも、例えばワルシャワが「壁のひび一本まで」復元を試みたのと対称的だが、破壊される以前にそれほどのものが残っていなかったとも考えられる。ともかく見所を失い、港をしばらく彷徨ってそのまま宿へ帰った。

シャワーなどを浴び、一時間ほどを過ごした後、黄昏れた街を近所のスーパーマーケットまで買い出しに行く。オレンジジュース1ℓ 0.78€(113円)、ミネラルウォーター(炭酸)1.5リットル0.5€(72円)、レタス545g 0.92€(133円)、ヨーグルト500cc 1.65€(239円)、ポテトサラダ1.39€(201円)、ミネストローネ0.89€(129円)、レジ袋0.04€(6円)。



宿の二階から玄関口を見下ろす。古風な雰囲気が好みだ。



利用した三人部屋。

話題のない一日

11日の金曜日にも晴れが続いていた。この日もかなりの時間、市内を歩き回ったけれど、話題にするようなことはほとんどなかった。撮影枚数66は、通常より少ないもので、これをつぶさに見ても、思い出すことはありなが

ら、話題というほどのものは見付からない。ということで、この章は読み飛ばしていただいた方がよいかもしれない。

朝ホテルを出るとき、オーナーがいたので挨拶する。返礼はあったものの渋面のままだ。やむを得ないと思いつつ、観光案内所のお節介を忌々しく思い出した。

昨日港を歩いたとき、光り輝いていた手紙の聖母像の足下辺りからメシーナが眺められないかと道を探すが、見付からぬまま結局諦めざるを得なかった。

一旦出直し、インターネットカフェの所在を「もう一つの案内所」で尋ねた。六十前後の気さくなオヤジがマーカーを取り出し、こちらが持参した平面図に順路を記入してくれる。—— 現在位置が此处で —— と、まずマークし、—— この道をまっすぐ行って、この交差点を曲がると... —— 説明しながらのマーキングが、過不足なく判りやすい。

礼を述べて案内所を出ると、徒歩10分のインターネットカフェを訪ねた。メールのチェックと鉄道時刻の調査などに半時間強。料金は1.2€(174円)。

港から市内をめぐり、クリスト・レ教会の丘など、半分くらいは昨日と同じ場所を通過する。気温は22℃あり、坂道などを登ると汗ばむものの、比較的爽やかに感じるのは湿度が低いのであろうか。二時間近く歩いて、これといった収穫のないまま大聖堂近辺へ戻る。

郵便局のCD機を見付けてcitibankカードが利用できるか試した。問題ない。支払限度額が低いので、200€と250€キャッシング。2時半を廻っていたので、そのまま指呼の間にある昨日のオステリアへ寄る。

スパゲッティ・ポモドーロとミックスサラダ、グラスで赤ワイン。電子辞書でイタリア料理のマナーを学んでから、第二の料理まで頼むように心掛けてきたが、昨日今日とそのパターンが崩れている。店の雰囲気と、—— オステリアならば、この程度の軽食で許されるか —— の甘えもあった。

大抵どこでもそうだけれど、二日続けて訪れるとオヤジの機嫌も良い。先客数名がいたが、相変わらず常連中心だ。常連客の末席に連なったような気分で、寛いで食事を楽しむ。料金は席料1.5€(217円)、ミックスサラダ3€(434円)、スパゲッティ6€(868円)、ワイン3杯6€(868円)、カプチーノ2€(289円)。

食後さらに一時間彷徨ったものの相変わらず収穫はない。最後にスーパーマーケットに寄り買い物をする。



ジン一本6.29€(910円)、ミネラルウォーター(炭酸)1.5ℓ0.49€(71円)、アスパラガス瓶詰め2.69€(389円)、ヨーグルト500cc1.65€(239円)、ヨーグルトを食べるためにティースプーン2.01€(291円)、レジ袋0.04€(6円)。

チェファルー

11月12日の朝は快晴だった。8時に宿を出発し、徒歩5分の駅でチェファルーまでの切符165km7.9€(1,143円)を購入。8時25分パレルモ行き列車の発車番線を確認するために、機械式掲示板を見上げると、1番線であることは良いとして、余計なことが表示されている。電子辞書で調べたところ40分の延着らしい。出だして躓いたような感じはしたものの、急いではいないのでから努めて悠長に構える。

8時40分に長い編成の列車が入線してきた。前日の午後4時40分にミラノを発車し、ローマ、ナポリを経由してきた夜行寝台列車だ。——35分も遅れずに済むのか？——と思ったのは見通しが悪く、この駅でシラクサ行きが切り離され、さらにメッシーナ以降から乗車する客のために(寝台車ではない)普通車両が連結される。作業時間は20分。

ともかく9時になり、ようやく乗車できた。右側窓際に席を確保する。シチリア島の北岸を西へ向かって行くから、海辺の風景を期待していた。9時10分に発車する。

間もなく長い(ドライブマップで見ると約10キ



グリーンアスパラガスの瓶詰め。



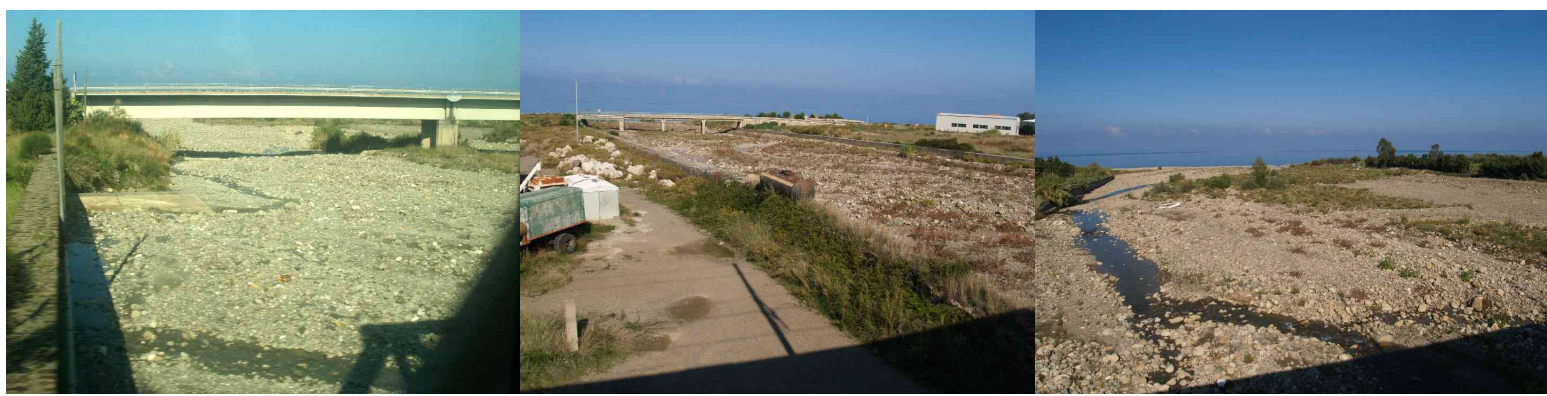
上:メッシーナ駅。下:ミラッツォ湾遠望。

ロ)トンネルに入った。これで東海岸から北海岸へ抜けることになり、トンネルを出るとミラッツォ湾が見えてくる。以後は概ね海を見ながら変化のある景観を楽しむ路線が続いた。

通路を隔てた隣に坐るビジネスマンはアタッシュケースの書類を拡げて仕事をしていたが、一区切り着いたところで乗車券を取り出すとなにやら



丘の上に豪壮な建物。細部を見るとリゾートホテルであろうか？



シチリアの河川はおよそ大陸的ではない。しかし「どこかで見たような？」と考え、思い当たったのは日本だ。シチリアの面積は四国より一回り大きい程度だから、急流と河口付近でも石ころだらけの河原が存在するのである。



海に突き出している岩山の向こう側がチェファルー。

書き込みをしている。どうやら刻印替わりの乗車日時間らしい。システムを考えれば、要点は「同じ乗車券は一度しか使えない」ことを確実にすればよい。すると刻印機を使用せず、利用者が手書きしても、これを消すことができなければ目的は達せられる。本当にこの理解で良いならば、今後実行したいところだが、そこまでの確信はなく、車掌に確かめるほどの意欲もないままに終わった。

11時を廻って前方に小さいが個性的な岩山が見えてきた。時刻から推定してもあれがチェファルーと思う。集落があり、短いトンネルで岩山の下をくぐると、すぐにチェファルー駅だった。

十人ほどが降車するが、観光客の姿はない。こぢんまりした駅前広場に、「役立たずの市街平面図(P. 87)」と罵ったのと同じ意匠の地図がある。しかしこちらは鉄道と海が目立つように描かれているので、現在位置も進むべき方向も把握できた。市街の中心に観光案内所があると、マークが教えてくれる。

しばらく行ったY字路でどちらに取るべきか迷った。そばに佇んでいた三十前後、濃いサングラスを掛けた美人風に、メモホルダーの *ufficio turistico* を見せながら英語で尋ねた。彼女は——英語は不得手なので——といいながら、サングラスを外して四、五歩位置を変えた。通りの向こうを指し——あそこに見える……——と親切に教えてくれた。ちなみにサングラスを外した素顔は、知的だけれど愛嬌もある美人であった。鄭重に礼を述べる。

観光案内所には女性二人が詰めていた。年配の方は接客中で、対応してくれたのは学生風の見習いあるいはボランティアといった感じの女の子だった。英語も達者ではないけれど、こちらの要望は充分通じ、市街平面図とホテルリストを入手する。彼女はホテルリストを渡す前に——これは現在休業中——と斜線で消してゆく。A3用紙の両面にコピーされていた41の宿泊施設中、実に23は休業中であつた。

残りから——駅または此处から近いところ——と指定すると、マークされたのは僅かに三つしかない。これを市街平面図上で再びマークして貰い宿探しに出掛ける。——小さいところだから可能であろう——とあって頼んだ荷物の一時預かりは、快諾してくれた。

案内所のそばに二軒あり、B&Bの方が少しばかり海に近い。—— 運良くオーシャンビューの部屋でもあれば —— などと虫の良いことを考えてこれから当たってみた。しかしすぐ見付かったそれは、

「電話をしろ」の貼り紙があるだけで、B&B名が表示されたインターホンはない。

ホテル・ラ・ジャーラのツインルーム。



試しに無名インターホンのボタンを押してみた。すぐ脇の錠戸が開き、バアサンが不機嫌な顔で(多分)「B&Bとは関係がない」という。経営者は別の所に住んでいるらしい。

電話までする気にはなれず、第二候補のホテル・ラ・ジャーラを尋ねた。徒歩1分の所にある。フロントには三十前後だが女将らしい女性がいた。身長170センチ、体重80キロといったところか。体型に似合った陽気なオバサンで、部屋は一泊朝食付き54€(7,813円)が、一つだけ空いているとのことだ。

見せて貰った部屋は悪くないものの街路に面し、自動車の騒音が危惧される。—— シーズンオフになぜそれほど込んでいるのか? —— 尋ねたところ、明日の日曜日に自動車レースが開催されるので、関係者が大勢押しかけているのに、休業中の宿泊施設が多いためらしい。そのようなれっきとした理由があるならば、悠長に構えていると泊まり場所がなくなるかもしれない。

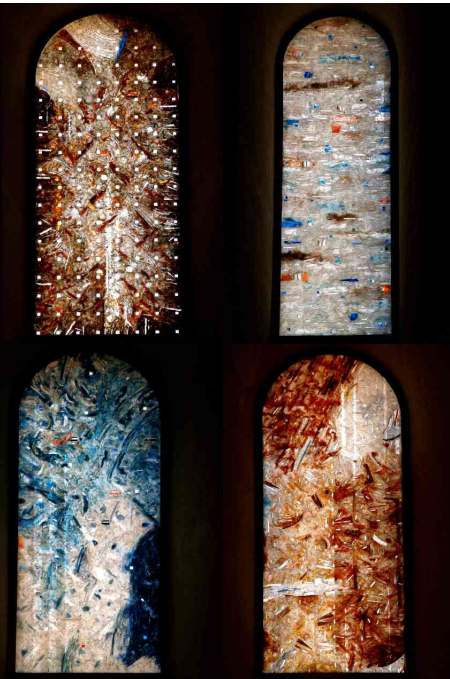
駅前にあるもう一軒の検分はやめて、此処に二泊することにした。

徒歩2分で案内所へ戻り、礼に添えてラ・ジャーラに決めたことも告げる。荷物を受け取り宿へ収めると、チェファルー見物を開始した。

まず大聖堂、というか、この街で見るべきモニュメント的なものは他にないのだ。

階段付の前庭を持つファサードは堂々としたもので、13世紀に創建が始まったものらしい。中にはいると数人の観光客がいたけれど、祈りを捧げる姿はない。ファサードもそうだが内部の感じもモンレアールのカテドラル(P. 16)にどこか似ている。

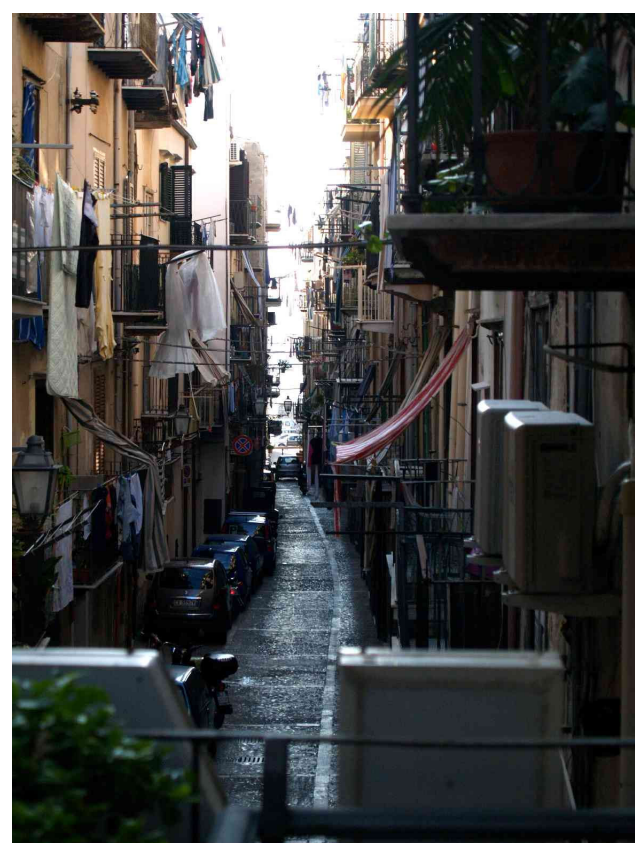
ロマnescクからゴシックへの移行期と理解したら良いのか、そこら辺は不明だけれど、スケールが大きくなっていながら、過剰な装飾がないことを好ましく感じる。



大聖堂の明かり取り窓のガラスはノルマン建築とは思えないモダンなものだが、由緒は良く判らない。



大聖堂の後陣を飾るビザンチンモザイク「全能のキリスト」



ラ・マリーナへ向かって緩く下る坂。泊まった部屋のバルコニーから撮影。

メカジキ

大聖堂を出て浜辺へ向かい宿の前を通過して石畳の路地を行く。両側に四、五階建ての住宅が並び薄暗い路地から、海岸へ出ると一気に視界が広がり明るくなる。11月も中旬だというのに、泳いでいる人がいた。流石に一人、二人であったが、寒そうには見えな



浜の方からラ・マリーナを眺める。

かった。

浜辺を一回りして昼食にする。海岸遊歩道から車道を挟んだ内陸側に、カフェ、レストランが軒を並べている。なぜかテラス席はほとんどなかったの、窓際に坐れば開放感の味わる店を選んだ。1時を廻ったばかりなので、先客は一組だけ、自由に席を選ぶことができた。

お品書きは観光地らしく、伊英独の三カ国語併記で判りやすい。パレルモの失敗(P. 10)以来、基本的には続けてきたスパゲッティを中断し、第一の料理をスープ、第二の料理をメカジキのステーキにする。

メカジキはシチリアを代表する食材の一つらしく、魚屋の店頭で丸ごとが飾られているのをよく見掛けたし、レストランでも一匹丸ごとを陳列し、そこから切り取って調理場へ運ぶようなスタイルは珍しくない。ローマからの飛行機で臨席だった伊藤さんも、「シチリアでは(pesce) spada(メカジキ)のステーキを試すつもり」といった。つまりは、旅の始めから気になっていたのだ。

一見カレーを思わせるような色合いの野菜スープは、トマトの色が影響しているのか、ともかくカレーとは無縁のもので美味。メカジキステーキは前置きが長かった割には印象が希薄で「可もなく不可もなし」だったようだ。魚のソテーが本来好みでないことも関係ありそうに思う。その意味で付け合わせの温野菜が旨かったのは、要するに野



メカジキ。パレルモのパラロ市場で。



上:野菜スープ。中:メカジキのステーキ。下:付け合わせ温野菜。空豆、ホウレン草、ブロッコリー、インゲン、その他。

菜が好きなせいらしい。

料理に格別のことがなくても、明媚な海岸と、波打ち際まで迫る石造りの古い建物群を眺めながらの食事は楽しいものであった。一時間ほど掛けて、最後をカプチーノで締めくくる。勘定は席料1€(145円)、野菜スープ6€(868円)、メカジキステーキ10€(1,447円)、温野菜3.5€(506円)、ミネラルウォーター(炭酸)500cc壺1€(145円)、白ワイン500cc3.5€(506円)、カプチーノ2€(289円)であった。

浜辺の長閑で開放的な気分に着かれたのか、しばらく周辺を散歩することにした。海岸を南西にしばらく行き、街外れに近付いたところで左に折れて内陸部に向かう。駅を示す道標があったのでそれに従い駅に至り、いびつな形ながら円環が結ばれた。ごく大まかではあるが、街の地理的イメージが頭の中に像を結ぶ。

駅からは一度辿った道筋であり、観光案内所を見付けることに集中していたときと、周囲のあれこれに面白いものはないかと、視線を巡らせながら

漫ろ歩くのでは見えてくるものが違う。プーピ劇場なども先程は見逃していた。

この手の劇場が立ちゆくには街の規模が小さすぎるようにも

プーピ (pupi)

シチリア独自のマリオネットであり、19世紀半ばから盛んになった。街によりそれぞれのスタイルを持つ郷土芸能でテーマはフランク＝ノルマンの物語が中心。海賊や聖人の物語など大衆演劇の傾向が強い。人形の特徴は金属製の鎧を纏い、善玉と悪玉の決闘シーンが山場となる。



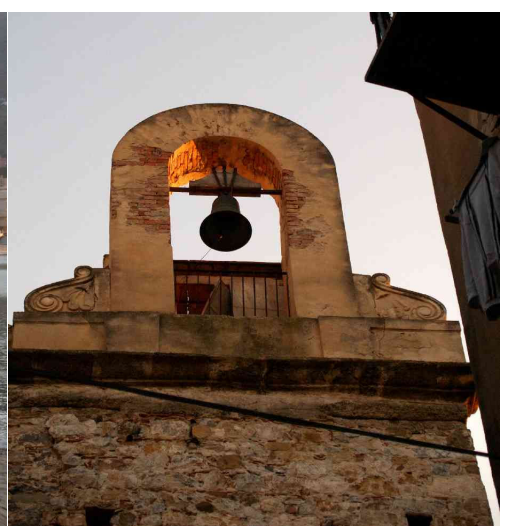
プーピ(糸操り人形)劇場。観劇はしなかった。

思われるけれど、観光客を対象としているのだろうか。この宵の出し物は「パリ封鎖」で「絶対の活劇」を惹句としていた。

大聖堂の前を通過したのが3時ちょっと前で、この時間帯は観光案内所も閉まっているし、街を歩いている人も少ない。通りを突き当たりまで行き、北側の寂しげな磯を一瞥してから、宿へ帰る。



屋下がりの物憂げな雰囲気漂うドーオーモ広場。



家路を急ぐ職人。左手に持つのは量り売りのワインだろうか。

辺りは既に翳ってしまったが、数メートル上の鐘楼は夕日に輝いている。

4時半近くなり、再び外出した。路地を行き交う地元の人達のあいだには、週末の夕方らしいのんびりした雰囲気漂う。ラ・マリーナの浜辺へ出ると、辺りには黄昏の赤みがかった光に満たされ、西を眺めると、落日は既に東にある岬の陰に隠れている。しかし振り返ると数メートル上では、建物が直射日光に輝いているし、遺跡などのある岩山ラ・ロッカの岩肌は昼間とあまり変わらず見える。

—— ラ・ロッカに登れば夕日を眺められるか。 . . . —— の思いに、急遽街を横断して登り口へと急いだ。登り口で海拔高度は15メートルほどであろう。しかし明暗の境界線は移動し、5メートルほど上方にはっきり見て取れた。脚力には多少自信がある。中腹で夕日に追いつけることを確信し、急ぎ足で登った。しかし一向に間隔は縮まらない。未だかつてこれほど太陽の移動を意識したことはなかった。いっそのこと差が一気に広がれば諦めもつくが、こちらの努力をあざ笑うかのように、「数メートル」を常に保ち続ける。

50メートルほど登ると肩に到達し勾配が緩くなる。さらに登ればもう一度勾配が急になって頂上に至るが、もう夕日に追いつけないことは明白になった。遊歩道は頂上へ行くもの以外に、肩の上を巡回するものが網の目上に設けられている。既に辺りには闇が迫りつつあるものの、歩くのに不自由するほど暗くなるまでには今しばらくある。つい先程まで、ひたすら急いでいた反動もあり、ゆっくり辺りを徘徊してから下った。

登り口まで降りると、街はすっかり夜の帳に覆われていた。浜辺に近いインターネット・アクセスポイントを

訪ねる。此処はビリヤードなどのゲーム屋が、4台ほどのPCを用意している。管理のいい加減ところで、身分証明書など必要なし。料金は30分で2.5€(362円)だった。

宿のそばにある食料品店でドライマト4.5€(651円)、ミルク500cc1€(145円)、ハム100g^{グラム}2.1€(304円)を購入。ハムとドライマトをつまみに晩酌を始める。



ラ・ロッカの肩から見る夕焼け。

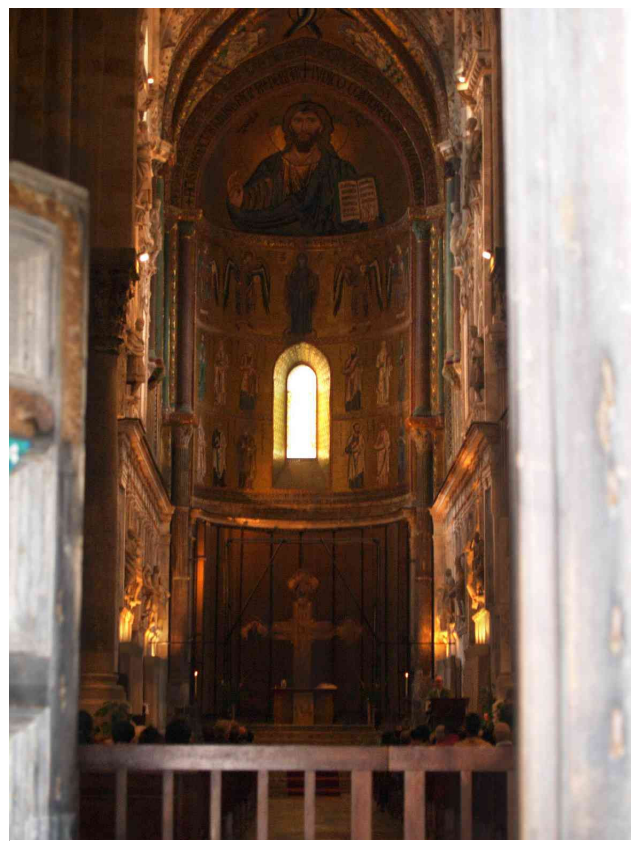
自動車レース

13日の日曜日は、今にも降り出しそうな曇り空だった。8時に朝食を摂りにロビーへ降りる。ロビーの隣が食堂のスペースなので、此处で朝食と思いこんでいたのに、明かりが点されずに薄暗いままに放置されている。訝しく思いフロントにいた女将に尋ねると、カウンターの下からチケットを取り出し—— これを持ってドゥオーモ広場のカフェに行けば、朝食を供してくれる —— との説明だ。ヨーロッパで数百軒のホテルに泊まったけれど、朝食券で遠隔の提携カフェという方式は初めての体験だ。

仕方がないので、チケットを片手に広場へ行く。徒歩2分の近さとはいえ、雨風の強い時などは宿泊者に不愉快な思いを与えるシステムだと思う。

カプチーノとクロアッサンの朝食を終え、しばらくベッドに寝転がって読書などに時を過ごし、9時半近くになって外出した。相変わらず天候は良くないけれど、気温は20℃あり、シャツ一枚で寒さを感じることはない。

街中を一回りし、大聖堂のミサを垣間見たあとは、これといった行き場所のないまま、岬の海沿い通りを歩き、プレズィディアナ港の方へ回り込んでみた。



大聖堂で朝のミサ。教会の外から撮影。

およそ30メートルの眼下に港が見える辺りに至ると、甲高い自動車のエンジン音が聞こえてくる。さらに進むと、ステッカーを派手に貼り付けた車が次々現れ、急なカーブを曲がって坂道を下り、港の方へ姿を消す。昨日女将がいった「自動車レース」らしい。

モータースポーツにほとんど興味はないものの、何しろ自動車レースを直に目にするのは初めての経験だし、他にすることもなかったのでしばらく見物する。公道を一般車両と共有しての走行だから、当然のことながら荒々しい運転はない。それでも特別フェンスもない眼前数メートルを、次々レース車が通過して行くのは面白かった。



レース参加車両(の一部)。公道を閉鎖せず一般車両と混在して競争する。

12時半を廻って昼食に出掛ける。昨日と同じアル・ガビアーノへ行くと、時刻が早いのかの懸念にもかかわらず、既に開店し先客もいた。看板にはBar-Ristorante-Pizzeriaと書いてあるものの、レストランよりもカフェに近いのかもしれない。

昨日食事をしながら気付いたのは、アンティパスティにビュッフェ形式もあることだ。シラクサ以来のことだし、その土地(シチリア)の料理になれないものにとって、とにかく実物を見てから好みの量だけ、そして正体不明ながらも興味を惹かれたものならば少量を選び取れるのは有り難い。

そんなことでこの日の昼食は、お好み前菜、パスタ路線に戻ってスパゲッティ・ボロネーゼ、二番目の料理として昨日隣のテーブルに出されたのを美味そうだったムール貝のスープ、付け合わせにホウレン草と、通常に較べれば随分大量のものになった。

日曜日であることに加えて、多分自動車レースの影響もあり、表を漫ろ歩く人波も昨日に倍するような感じだ。自ずと店を訪れる客も多く、2時に近づくにつれ、ほどなく満員状態となるのは確実に思われる。そうなると四人掛けのテーブルを一人で占有しているのはいかにも具合が悪い。

掻き込むようにして食べたわけではないが、それでも手早くムール貝の残りを片付けた。料理を全て平らげたところで、改めて店内を見回すと、十人ほどの団体が、軽い昼食を早々と終えて出て行ったりなどで、二、三の空きテーブルがある。カプチーノ一杯を追加して食事を終えた。料金は席料1€(145円)、アンティパスティ6.5€(940円)、スパゲッティ・ボロネーゼ5€(723円)、ムール貝スープ8€(1,157円)、ホウレン草3.5€(506円)、カプチーノ2€(289円)、白ワインデカンター500cc3.5€(506円)。

漫ろ歩きで宿へ向かう。刺繍学校のショーウィンドーを(それと知らず)覗いたり、ラ・マリーナの浜に寄り道したり、微醺を帯びた状態を楽しんでから午睡。



ショーウィンドー越しに、趣味の良い刺繍が展示されているのを見付けた。しかしドアは閉ざされたままだった。夕方再訪しても開いていない。紀行文を書く段階になり、改めて写真を拡大表示すると、中央の額に Scuola di Ricamo。辞書でしらべたところ、刺繍学校であった。日曜日は休みなのだ。

4時近くなり夕方の散歩に出掛けた。海岸通りに出ると、数はそれほど多くないけれど、レーシングスーツ姿が目立ち、人波も昼頃よりは混雑している。おそらく自動車レースが終了し、最後のセレモニーに向けて、関係者や野次馬が集まっているらしい。

前方にゲート状のものが見え、そのまま進んで行くと混雑が甚だしくなる。業務用ビデオカメラを携えた報道関係者らしい姿なども見え、いずれにせよ人混みは苦手なので足早に通り過ぎる。

50メートルほど行った頃に、背後で歓声が上がったので振り返ると、ゲートかと思ったものは表彰台で、優勝者にトロフィーが贈呈されたところだ。距離的には長焦点ズームレンズを使用したい被写体だけれど、そんなことをしているとセレモニーは終わってしまうだろう。標準ズームの望遠側で撮影し、トリミングしたのが掲載写真だ。

そのまま海沿い遊歩道をサンタルチア岬へと辿る。漫ろ歩いて半時間ばかり、岬の根本に到達したものの、そこから先は「地中海クラブ」のコテージが建ち並ぶエリアで、鉄柵のゲートが一般人の立ち入りを拒んでいる。

しかし此処まで来た目的は、散歩の楽しみもさることながら、海上に浮かぶチェファラーがどのように見えるかであった。4時半を廻り、そろそろ沈もうとしている夕日は、赤味を増したその光を大聖堂や街、ラ・ロッカの岩肌に投げかけ、柔らかな風景を演出していた。これを撮影できたことに満足し、引き返すことにした。



優勝者にトロフィーが贈呈された後、お決まりのシャンペンシャワー。



サンタルチア岬からチェファラー遠望。

切符の購入

翌14日も晴天が継続していた。8時29分発の列車を利用してパレルモ経由セジェスタを訪れるつもりで、7時半にチェックアウトする。人のほとんどいない海岸通りを、朝の海を眺めながら経由し、20分足らずで駅前に到着。意外に大勢のティーンエイジャーがいて、スクールバスが次々彼(女)等を運んでゆく。高校でもあるらしい。



チェファラー駅前、7時53分。

彼等を掻き分けるようにしてコンコースに入る。しかし自動発券機はあるものの切符売りの窓口は閉鎖されたままだ。パレルモまでであれば、発券機で済むけれど、セジェスタとなれば可能であるにせよ操作方法が判らない。ラグーサから乗車したとき、車内で簡単に買ったことから、今回もその方式にした。

の方式にした。

発着表示板を見ると、予定していた列車の前に8時12分発があり、まもなく到着する。このように複数選択可能な場合、必ず早い方を利用する。あとの列車は延着、極端な場合は運休するかもしれないから。それにそのような理屈を抜きにしても、此処よりパレルモの方が時間潰しに向いているのだ。

この辺りはパレルモまで一時間程度の圏内にあり、通勤通学列車として機能しているのか、車内は既にかなり混み合っていた。チェファルーでも数十人乗り込んだけれど、(窓際は望むべくもないが)何とか坐ることはできた。

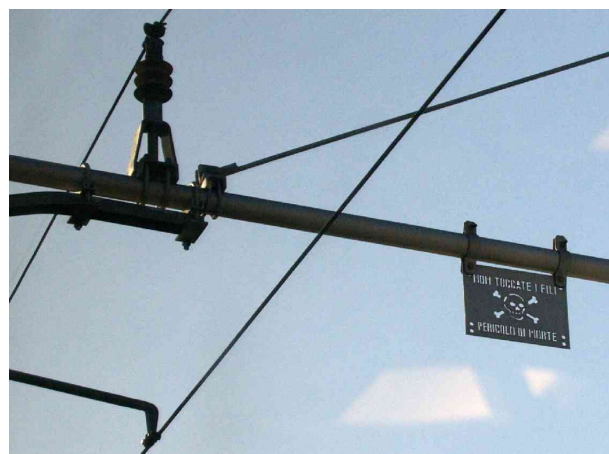
車内で切符を買おうと、制服を着た乗務員が通りかかったので呼び止めた。しかし彼は何事か告げてそのまま去って行く。急ぎの用事があったのか、はたまた乗務員であっても車掌ではないのか、ともかくその後も機会を窺っていたのに、そのまま切符を買わずにパレルモ駅で降車することになってしまった。定刻8時55分に到着。

セジェスタへは9時40分発のトラーパーニ行きに乗ればよい。ちなみにこの便は三週間ちょっと前に利用したものであった。乗り継ぎ時間は充分過ぎるほどあるけれど、まず切符売り場へ行き、チェファルーからセジェスタの乗車券を購入する。駅員は通常あり得ない注文に怪訝そうな表情を浮かべてこちらの顔を見たものの、それも一瞬のことで、何もいわないまま発券してくれた。161キロの2等乗車券は7.9€(1,143円)であった。

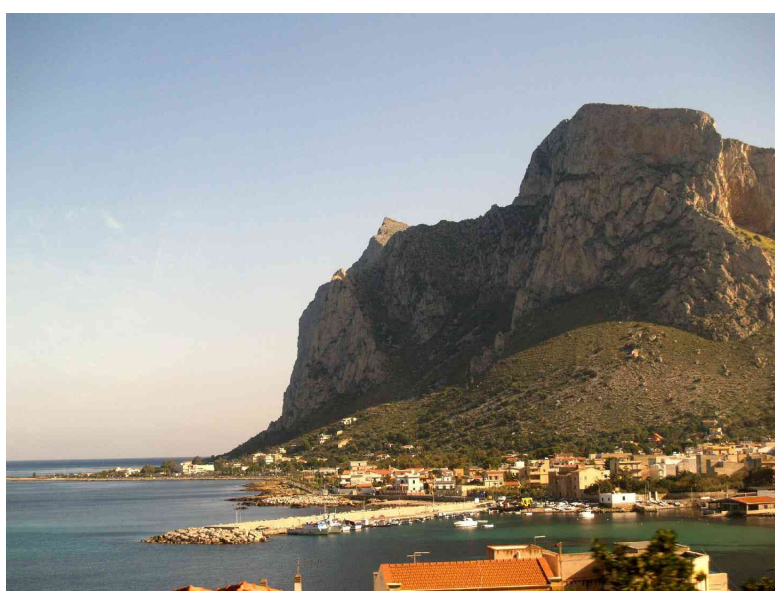
駅前ホテル

9時18分に満員の乗客を乗せて到着した列車が、折り返しトラーパーニ行きになる。発車時刻より20分も早くから待っていた暇人は数人なので、席は選びたい放題だ。海が見える右(北)側の窓際に坐り、荷物は網棚の上に乗せる。前回の経験からするとかなり混むはずだ。

予想は変わらず、そして発車すると数駅でがらがらに空くのも同じだった。前回は晴天とはいえ、薄い雲が広がっていた



パレルモ駅で停車中、架線を見上げると「危険注意」の標識が貼り付けてあった。日本とは標識を付ける基準がかなり異なるようだ。



チニシ付近。



カステルランマーレ湾遠望。

が、今回は気持ち良く晴れ上がり、車窓風景を楽しめるものにしてくれる。空港に一番近いチニシ駅に停車した際、空港へのアクセスに使えるのかを観察したけれど、旅行者風で降車したのは一人だけであった。彼が空港に向かうのかも不明だし、アクセスには不向きであろうと思う。

40分ほど海沿いを行き、大きく右へカーブするとアルカモ・ディラマジオーネ駅に停車する。車内前方から若い男二人が話しながらこちらへ移動してきた。その言葉から日本人と判り、何となく会話が始まり、彼等はこれからトラーパーニで昼食後、列車を乗り継いでマルサーラまで行くとか。イタリア国内の鉄道時刻表を所持し、これを見ながら現在10分ほどの遅れで運行されているらしいなど教えてくれた。

セジェスタが近付き、車掌のいる前方へ移動する。全てのドアが開くらしいと思いつつも、確実さを求めたためだ。到着前、車掌に「次の駅がセジェスタ」と訊くことにより駄目を押した。

無事降車し、窓越しに日本人青年達へ会釈すると、慇懃に深々と頭を下げられ、心ならずも—— 相手を若年とみて尊大に振る舞ったようで —— 慌てる。改めて頭を下げるうちに列車は走り出した。他に降車した人はいない。

走り去る列車を見送ってからゆっくり辺りの状況を観察する。駅舎はなくその代わりにレストランと



セジェスタへ繋がる扇状地。緩やかな丘陵地帯はほとんどが葡萄畑。画像中心部に連なるコンクリート構造物はトラーパーニとパレルモを結ぶ高速道路。

バルが入居する鉄筋二階の堂々たる建物がある。ちなみに駅設備として出札はおろか自動発券機もなく、信号設備関係などがこの建物に居候している。レストランはガラス越しに様子を窺うと、100席程度はありそうで、テーブルも全てセッティング



レストラン(奥)とバル(手前)。プラットフォームは建物の裏側にある。

されているものの、閉め切られているようで人の気配は全くない。

プラットフォームを出て、バルの正面に廻った。こちらは開店している。視界の及ぶ1キロ程度の圏内を見回して、商店はおろか人家の一軒も見当たらず、勿論タクシーもない。数台停まっている乗用車はバルを訪ねてきた人のものらしい。

セジェスタに立ち寄ることを決める前に、一応ホテルは調べた。インターネットのホテル検索サービスで Segesta に二軒のホテルがあり、通年営業しているらしいと推定できた。しかしその時思い描いていたのは —— 駅そばには小さいながらも集落があり、高々10分も歩けばホテルに到達できる —— 程度のもので、今眼前にあるのは夢想だにしなかった光景だ。

駅前には線路と平行する道路が一本あり、これをどちらへ行ったものか。ともかく時刻は12時前で、最悪の場合にはトラーパーニへ行くことも、パレルモへ戻ることも可能だ。バルに入ってカプチーノを一杯飲んでから、カウンターの中にいたアンチャン風に尋ねた。身振りを交え —— ホテルはあっちか、こっちか? —— 。彼が指したのはトラーパーニ方面だった。

見渡す限りに人家はないので、最低でも10分は歩くものと、キャリーを肩掛け牽引方式で気合いを入れて歩き出した。100メートルほど行ったところでホテルの案内ポスターを見付けた。インターネットで調べたものとは名前が違っけれど、と

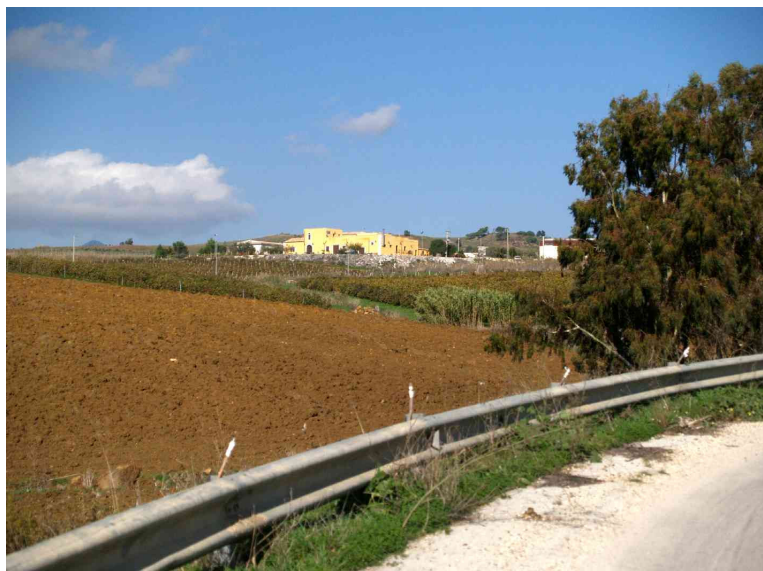


宿のポスター。

ともかく宿があるというのは良い知らせであり、しかし2.5キロも先というのは、いささかげんりする情報だ。

車の往来はほとんどなく、(左側の視界は高速道路に遮られているが)右側の一面に広がる葡萄畑を眺めながら、爽やかな大気の中を歩くのは気持ち良い。15分で踏切があり、これを渡ると道路は線路から離れ、緩い上り坂が始まる。斜面の小高いところに建物が見え、 —— あれが宿でなければ、さらに最小でも10分は余計歩かなければならない —— と、外れでないことを祈るような気持ちで5分、門からは砂利道のアプローチが50メートルもあり、ようやく中庭に通じる大扉の前に辿り着いた。

ところが扉は閉ざされたままで、インターホンその他もない。扉をガンガン叩いても、内側から反応はなく、いつの間にか姿を現した三匹の大型犬に吠えられるばかりだ。しかし半時間も掛けて来た(帰るにも同じ時間)ことや、他の宿は付近になさそうなことを考えれば、簡単に諦めることはできない。藁にもすがる気持ちで表をウロウ



丘の上のバツリョ・ポコロバ。

ロしていると、吠え声に気付いたのか、建物の横手からバアサンが顔を見せた。

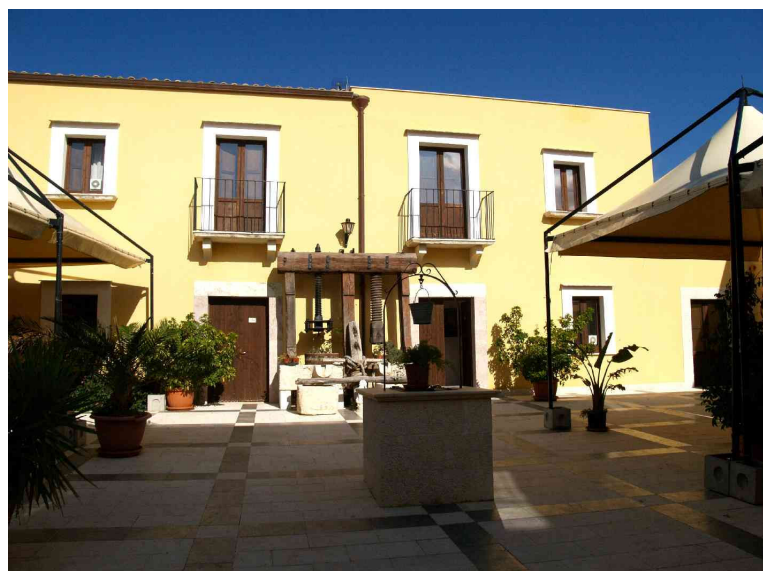
勿論英語は通じないが、電子辞書の助けを借りたりして、泊まろうとしていることは伝わった。一旦バアサン夫婦の部屋へ行き、筆談で部屋代の確認。持病があるのかほとんど寝てばかりらしいジイサンも話に加わる。一泊50€(7,234円)の呈示に憤然とする。パレルモ辺りならともかく、この山奥で、格別高級とも思えない宿にしては高すぎる。交渉は打ち切りにして、セジェスタ駅から一つトラーパーニよりになるブルカ駅まで歩こう。

ところがジイサンは、言葉の通じないことなど全く頓着しないでニコニコ笑いながら、(野球の)グローブのような分厚い手でこちらの腕を掴み——とにかく部屋を見て——らしきことを繰り返す。根負けして肯くと、バアサンを先頭に先程の大扉から中庭に入った。数カ所にドアがあり、そこからさらに数室に内廊下が続く。見せられた部屋は、キッチンに鍋や食器まで揃った、アパートメントスタイルだった。

これは予想外ながら、50€は高いとの思いは変わらない。値切るのは嫌いなので、振り切って出ようとする40€に値下げしてきた。それでも「高い」の思いは残りつつも、設備の良さと、さらにこれから別の宿を探す苦労を考えると、この辺りで手を打った方が良さそうだ。80€を現金で払い二泊することにした。老人二人は実務的なことはできず、チェックインは後刻となるが、とにかく部屋を確保し、鍵を受け取った。

あとから判ったことだけれど、かなり「危ない橋」を渡っていた。ブルカ駅周辺はセジェスタ駅以上に何もなくて、バルもレストランもなく、かててくわえて列車によっては停車もしない。トラーパーニやパレルモに脱出しようとしても、一筋縄では行かなかったのだ。

それではインターネットで挙がってきた宿はどこにあるのか。これはセジェスタ駅の一つ手前にカラタフィミ駅があり(この辺りも何もなくて)此処から3キロほどのところがカラタフィミの町で、



バッリョ・ポコローバの中庭。葡萄搾り機の右側にある、開いたままのドアから入り、すぐ右手の部屋を利用。

この中らしい。ここら辺の事情が明らかになったのは随分後のことなのだが。

宿が決まったので、改めて昼食、そして遺跡見物に出掛ける。駅から辿った道をそのまま戻ることになり、いかにも無駄なようでもあるけれど、歩くことそのものを楽しめる質であり、そしてこのうらかな日取りにのんびりと葡萄畑のあいだを辿るのは、贅沢な時間の使い方ともいえそうだ。



宿から駅へ向かう道。正面の丘頂上にギリシャ劇場がある。



ひっそりと静まりかえっているレストラン部分。ネット越しのため画像が不鮮明。



バルの出来合いグラタン。

駅に戻り着くと1時10分になっていた。密かに期待していたのは、——— この時刻になればレストランが営業している——— ことであったが、相変わらず人の気配がない。定休日なのであろうか。こうなると昼食を摂りたければ駅のバルを利用するしかなさそうだ。遺跡の付近にカフェが存在する可能性は「芸術と歴史の島シチリア」に紹介されているセジェスタ遺跡が、うら寂しいところにあることを考えれば、期待しない方が良さそうだ。

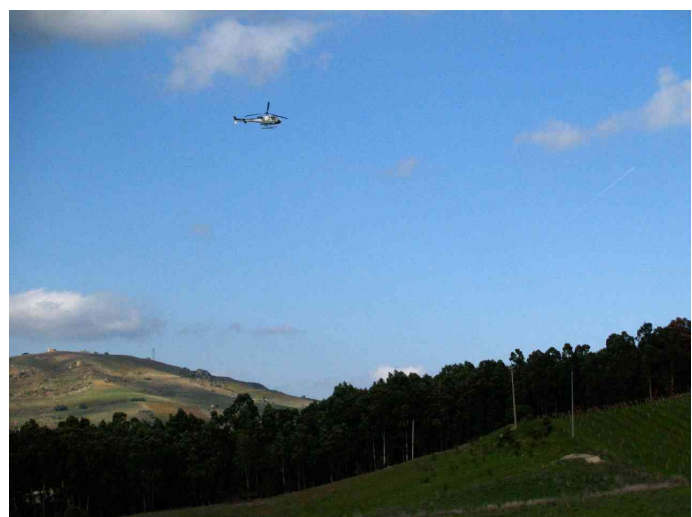
中へ入って先程のアンチャンに「食べ物」を訊くと、カウンターに置かれた菓子パンの類と、ショーケースの中にある出来合いグラタンのみらしい。グラタンは大型のキャセロールでまとめて焼いたものだけけれど、残りは僅かになっている。これを注

文すると、一人前皿に切り分け、電子レンジで温めてくれた。赤ワインもグラスで注文。

ワインはガラスコップに200ccほどが注がれた。料金は合わせて8€(1,157円)。温まったグラタンとコップワインを持って屋外席へ移動する。表はうららかに満ちているのに、どこことって取り柄のない室内にくすぶっているのはあまりにもったいない。

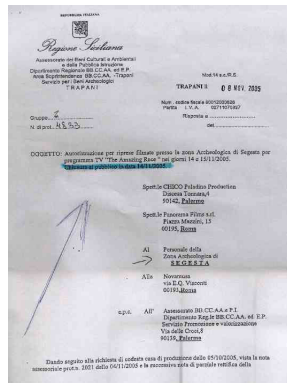
いつもであれば一杯で終わるはずのない昼酒だが、流石に出来合いグラタン一皿では、それほど呑む気にもなれず、15分ほどで昼食を終わった。出掛ける前に使用したトイレはレストラン部分の一角にあり、行きずりに改めて眺めても、完全に営業体制でのテーブルセッティングがなされている。

駅を離れカラタフィミやパレルモへ通じる街道に行く。葛籠折れの緩い上り坂で、相変わらず交通量は少ないけれど、一台のヘリコプターがけたたましいエンジン音を立てながら旋回を続けている。せつかくの長閑な雰囲気はぶちこわしになり腹立たしい。

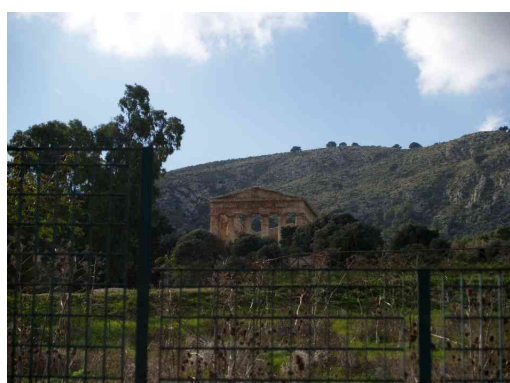


頭上を旋回し続けるヘリコプター。

20分ほど坂道を登ってゲートに到達したが、鉄格子の門扉は閉め切られ、警備員風が関係者だけを通してしている。ともかく声を掛けると、ゲートに貼られた書類を見るようながされた。



ゲートに貼られた閉鎖通告



フェンス越しに見る神殿。

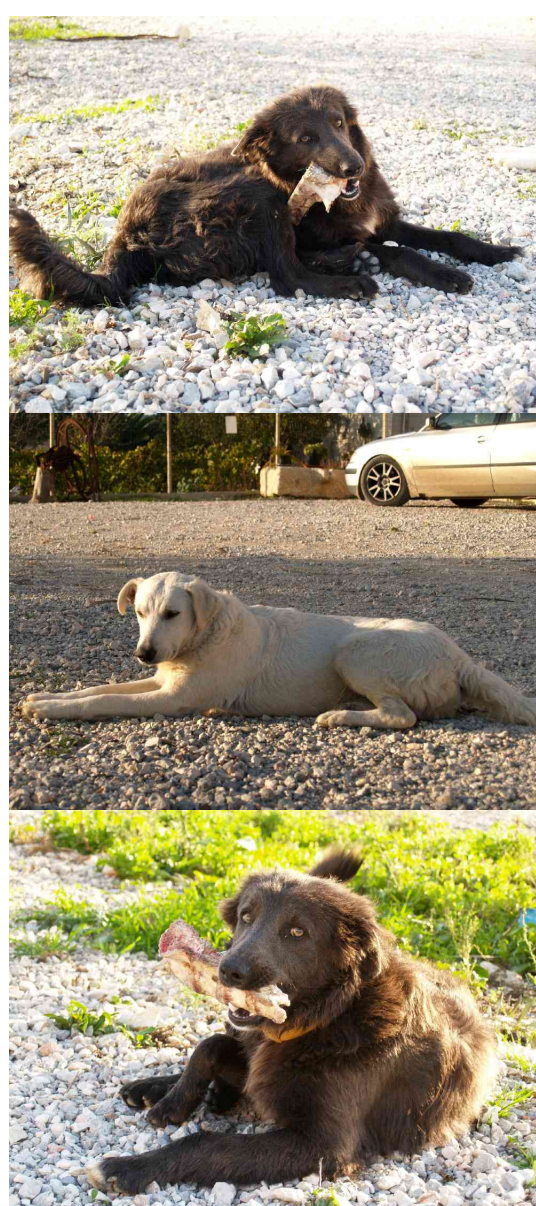
イタリア語の文書など判ろうはずもないけれど、片言隻句と辺りを動き回る「関係者」の風体、さらにヘリコプターを組み合わせて推察すれば、TVあるいは映画の野外撮影のため、遺跡は今日一日は閉鎖されているらしい。

狼狽あるいは落胆せずに済んだのは、明日の予定が全くないため——いかに一日を過ごすか？——に軽い当惑を覚えていたためだ。しかし明日も閉鎖が続くならば、それなりに対応を考えなければならない。例えば列車でマルサーラ行くことなどを。警備員にこの一点を確認すると、英語が通じないながらも、閉鎖は今日だけのことらしい。

引き返し明日出直すことは簡単に決まったものの、別の当惑が湧き上がった。晩飯、晩酌をどうするかだ。手持ちの酒もツマミも僅かなのは、移動に備えて調整したため、よもや一軒も店がないところへ逗留するとは、思いもよらぬことであった。

この時点で、セジェスタの次駅であるブルカ周辺に期待はあったけれど、きわめて頼りない願望に過ぎない。そのようなことから、取り敢えず帰り道に駅のバルにより、「試食」済みのマカロニグラタンを（切り分け方式なので適当な単位を思い付かないが、あえていえば）二人前を貰う。ついでにカプチーノも飲んで勘定は9€(1,302円)だった。

半時間の道のりを戻った。宿の周辺は無人のまま、ジイサン、バ



宿の犬達。

アサンの姿もない。どこからか宿の犬達が現れ、尻尾を振って歓迎してくれる。先程は激しい吠え声で誰何したのに、彼等には「宿の客」と、それ以外が明確に判るらしく、「客」になった瞬間から親しげな態度に豹変するのだった。

部屋に入ってじっくり設えを観察した。宿全体でどのようになっているかは不明ながら、現在使用的是のはアパートメントで、家族四人(あるいはそれ以上)が長期滞在するようになっている。トイレ・シャワーと反対側にあるドアを開くと、十畳程度の寝室で、取り敢えずベッド二つが置かれているが、広さからして追加は充分できる。

台所のある部屋にもベッドが二つ。扉にガラスの嵌め込まれた食器ダンスには、鍵が掛けられていたものの、観察したところでは六人分程度の



左上：概観。食器ダンス、テーブル、シンクとレンジなど。右上：食器ダンス。左中：調理台の下に組み込まれた皿洗い機。右中：オープン。左下：木製のカバードアがある冷凍冷蔵庫。右下：洗面所の電気湯沸かし器。

食器と鍋がある。レンジとオーブンは電熱で、熱量の調整機とタイマーが組み込まれている。冷凍冷蔵庫が剥き出しではないことも際だったが、シチリアでは当たり前のことかもしれない。

建物の裏手には小規模ながらもプールがある。総合的に考えれば、「夏休みを過ごす」リゾートとして開発されたようだ。此処まではすんなり理解できたが、腑に落ちない点の一つ残った。海、湖、川などもなければ、登ってみたいような山もなく、遺跡はあっても歩けば小一時間かかるし、だからといって車で毎日通うところとも思えない、このような立地で商売が成り立つのであろうか。他人事ながら気になった。

観察を終えても4時半は晩酌に早過ぎる。この時間を使って洗濯を始めた。洗面所の蛇口を捻ると、ほとんど瞬時に熱湯が出てくる。80℃以上ありそうで、注意しないと火傷をしそうだ。高温もさることながら「瞬時」に驚いた。シティホテルなどでは蛇口近くまで湯を循環させてこれを実現しているけれど、民宿レベルの此処がそれまでやるとは思えなかったのだ。

しばらく放水、断水を繰り返していると、頭上で湯の沸くような音がする。見上げると電熱湯沸かし器があった。「瞬時」の謎が氷解する。

洗濯を終えフロントも兼ねているバーを訪ねるが、相変わらず無人のまま。仕方ないので自室で休んでいたジイサンを起こして、ワインを一本分けて貰った。ルナ・クラーラなる銘柄で、飲みやすい白ワインであった。

オーブンがあるので、マカロニグラタンを再加熱する。容器がアルミ箔であったのは丁度具合が良かった。再加熱により、どれだけ味が良くなるかはさておき、侘びしさが豊かな気分が変わることは確かだ。アパートメントの滞在を楽しむ。

辺りが真っ暗になった頃、(中庭に面するドアが異なる)隣のセクションへ三人の作業衣を着た中年男が草臥れたような顔

をして戻ってきた。宿泊客とは雰囲気異なる。

宿の周辺には葡萄畑以外何もなく、犬の遠吠えや隣室からのTV音声などの雑音もなく、ひたすら静かな夜だった。

セジェスタの遺跡

15日も快晴だった。7時半に中庭を抜けて表へ出ると、三匹の犬が尻尾を振って歓迎してくれた以外は、動くものもなく静まりかえっている。朝の清々しい大気を吸って、辺りをしばらく散歩し戻ると、バアサンが姿を現した。中庭に通じる大扉をゴンゴン叩くので、訝しく思いながら――

開いていますよ —— と告げると、判っていると肯きながらさらにもう一度叩いた。頭上の窓が開き、髭面の中年男が顔を覗かせる。彼がバアサンの子であり、この宿のオーナーでもあった。

8時からバーで朝食を摂る。カプチーノとバターや自家製ジャムなど、質素なものだが暖かみがある。クロアッサンを食べていると、オーナーが籠に盛った熱々焼きたてのパンを運んできた。やはり焼きたては美味しい。昨日ジイサンから宿のレストランを勧められたときは、本当に食事ができるものか半信半疑であったが、考え直す。この日の昼食は此处で摂ることにし、1時からを予約をした。オーナーは流暢ではないにせよ英語を話す。

ちなみに「予約」したのは、満員をおそれたのではなく、逆に客がいないと開店しない可能性を考慮したためだ。しかし先走っていえば、昼にはコックなどの食堂スタッフ二人がいたから、不定期に開店するようなことはなさそうだ。

9時を廻って遺跡を目指し再出発する。気温は既に 24℃あっても、風があるせいか爽やかで気持ち良く歩ける。10時少し前に遺跡の鉄柵ゲートに到達した。昨日の「閉鎖告示」は既になく、通常の公開時間に関する表示を改めて見ると —— 歴史地区への入場は 9時から13時までで、入場者は14時までに退去しなければならない —— とのことだ。何のことはない、昨日は臨時閉鎖されていなくても入場できなかったのだ。

中にある売店で入場券を6€(868円)で購入し、順路も特別記されていなかったのので内部ゲートを通って丘の上を目指す。100メートルも行かないうちに、右手に保存状態の良い神殿が見えた。しかしそちらへ近付こうとして、あいだに深い谷があることに気付いた。道を間違えたらしい。

売店のある広場に戻り、奥の方にもう一



谷の向こうにドリス式神殿が見えた。

つのゲートを発見した。入場券は既に錠が入った状態なので、何か誰何されることを危惧したけれど、係のオヤジは不機嫌そうな顔でこちらを見ただけでなにもいわず通してくれた。

未舗装の坂道を100メートルほど登ると、堂々とした神殿が出現した。「芸術と歴史の島 シチリア」によれば未完成とのことだが、





カレンジュラ



マーガレット



フタナ



神殿の付近からバットリョ・ポコロバが遠望できる。もう少し神殿の位置が撮影位置に近ければ、宿から神殿を眺められるのだが。

素人目にそこら辺のことは判らない。これまで見てきた神殿遺跡に比して破損が少ないのは、中世から近世に掛け、近くに町らしいものができずに人里離れた状態が続いたせいだろう。

次々に訪れる人はいるものの、神殿の周辺の観光客が五人を越えることはなかった。後から来た老人は、今となっては滅多に見掛けることのない二眼レフ、ローライフレックスを持ち、丹念に場所を選んで撮影していた。言葉を交わしてみるとオランダの人で、現像から引き延ばしまで一貫してやる、ハイエンドのアマチュアだった。

この神殿は未完成のためか、どの神に

対するものか不明なようだ。そもそもこの遺跡を造ったエリモ族がトロイア人の落人説などもあり、ギリシャとは文字なども異なる文明を持っていたらしい。彼等の聖域とされていた陶器や碑文などが発見されているものの、あまり解説されていないとか。色々と謎に満ちた人種だ。

半時間ほど神殿を中心とした一帯を巡り、「謎の神殿」にも堪能した気分になる。改めて丘の上にある遺跡を目指した。急な坂道で標高差二、三百メートルを登るので、歩くことを好まない人はシャトルバスを使う。しかし歩けば、高度を稼ぐにつれて視界がぐんぐん広がり、先程巨大なものとして眺めた神殿が、小さく下方に見えたりするダイナミックな変化は楽しい。40分ほど掛けて辿り着いた頂上にはギリシャ劇場があった。しかしなぜこのような場所に劇場を造るのだろう。



未完の神殿。

遺跡の中で丘の上と広場を結ぶシャトル便。

カラタフィミ駅。列車が停車中。



ギリシャ劇場。左側遠方に蛇行するのは高速道路。その彼方にはカステルランマーレ湾。

タオルミーナのギリシャ劇場にも共通していえることだけれど、遺跡を訪れる現代人の目には、崩れ落ちた背景により、遠く海を眺めることが出来るから、一種のカタルシスさえ感じる。しかし劇場が

実際に現役であったときに、背後の風景を眺めることが可能であったのか。舞台効果に加えて音響効果を考えても、単純に背景なしとは思えない。

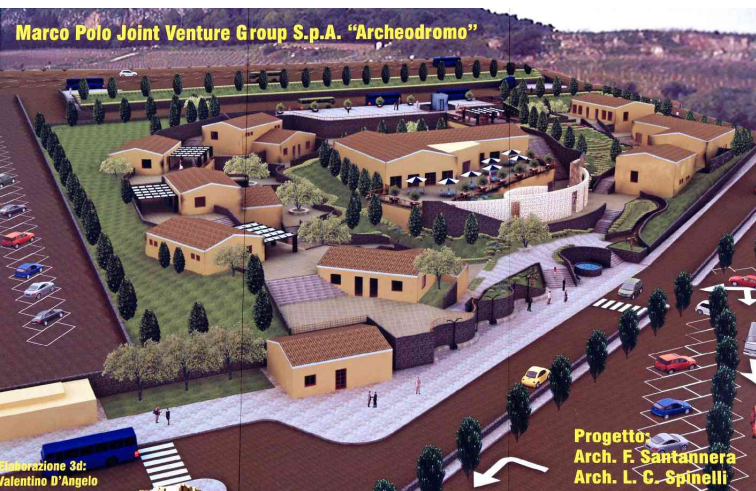
門外漢があれこれ考えても、所詮は的外れなことばかりであろうが、雄大な景観を眺めながらの空想は楽しかった。

丘を下り売店の隣にあるバルでカプチーノ1.5€(217円)を注文し、表の席でのんびり飲む。この日に残された予定は、予約済みの昼食くらいしかない。ギリシャ劇場からシャトルバスで下ってきた日本人の団体が、そろそろと神殿の方へ移動して行く。—— 朝パレルモを出発し、途中セジェスタへ寄ってアグリジェントまで行く—— そんな旅程だろうか。

しかしレンタカーなどを利用しない個人旅行者にとって、セジェスタを訪れるのは、列車、バスの便は少ないし、宿や商店に関してははっきり不便だといえる。それ故に秘境ではないにしても—— 随分辺境まで来た —— 感慨もある。一方パッケージ旅行の利用者は、高速道路でいとも簡単に到着し、一回りして高速道路で次の訪問地に運ばれる。とても「辺境」などの感想はないだろう。

カプチーノを飲み終わり売店を一回りした。土産物に興味はなく、手持ちが切れてしまった酒—— ジン、ウォッカなどの蒸留酒 —— を探したのだ。遺跡の売店にそのようなものを求めたのは、—— 僥倖を夢見て —— としかいいようがないけれど、やはりリキュール類が限界で蒸留酒はなかった。今晚も宿のワインで我慢するしかないらしい。

朝から風の強い日であったが、帰途は一段と強い北風が吹き付けた。足取りが乱れるほどであったから風速10メートルを超えていたかもしれない。



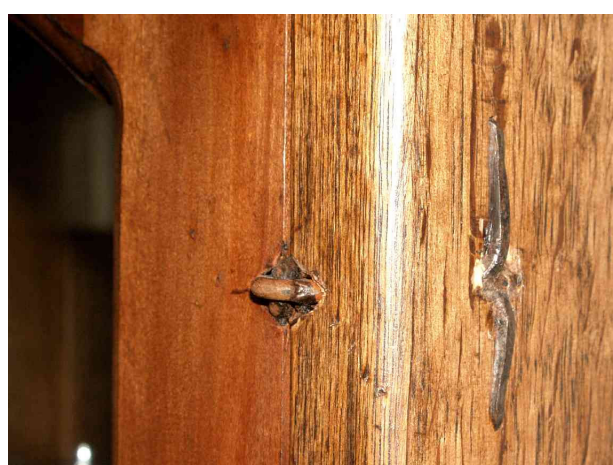
リゾート施設完成予想図(看板)。駅から遺跡の方へ数百メートルの工事現場にて見掛けた。パツリョ・ポコロバに較べ、駅も高速道路インターチェンジも、そして遺跡も近い。オープンした暁にはパツリョ・ポコロバにとって手痛い打撃になるのかと、他人事ながら一宿一飯の恩義もあり案じられた。



振り返ると丘の上にギリシャ劇場が見えた。



葡萄畑には散水のための黒いチューブがきめ細かく配されている。



のんびり歩いて、宿に着いたのは12時半であった。既にレストランは開店している様子だけれど、1時予約にこだわって半時間を「芸術と歴史の島 シチリア」のセジェスタ関係を見たりして過ごす。今更見落としに気付いても、手遅れだと思

いながら。一時びつたりと食堂へ入る。四人掛けのテーブルが八つ、ゆったりした間隔で置かれ、先客は若いカップルが一組だけであった。すぐにオーナーが「手ぶら」で姿を現したのでお品書き

を頼むと —— 定食しかない —— という。これから駅前バルへ場所替えする気にもなれないし、単品を注文できたところで、ごく一部を除きその内容が判らないから、定食の方がましな可能性も大きい。結局「注文」したのはワイン赤のピッコロだけとなった。

間もなく運ばれてきた料理は、いずれも素朴な概観と味わいで、レストラン料理というよりも家庭料理の雰囲気だが、それぞれに美味かった。自分で好みの量を取り分けられることも有り難い。食べ始めて間もなく、夫婦が十歳くらいの息子を連れて来ただけで、他に来店するものはなかった。この一家と当方に出る料理は同じ「定食」であったのに、カップルの食べているものは全然違う。好みのコースを予約するようなことが可能なのかもしれない。

ジイサンが厨房の方から姿を現した。持病のせいか動作は至って

部屋の食器ダンスに使われている蝶番。遠い昔、鍛冶屋が一つずつ打ち出していたもののイミテーションか。特注とも思えないが市販されているのだろうか。ちなみに蝶番(中央に写っている)に左側が扉、右側がタンス本体。正面側からなめ外側に孔を開け、蝶番を打ち込んでから上下に曲げ拡げて固定する。



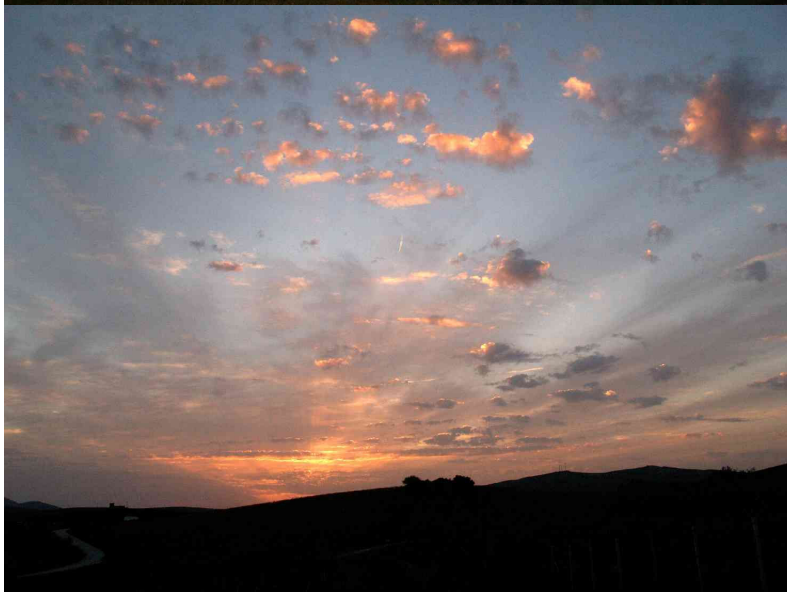
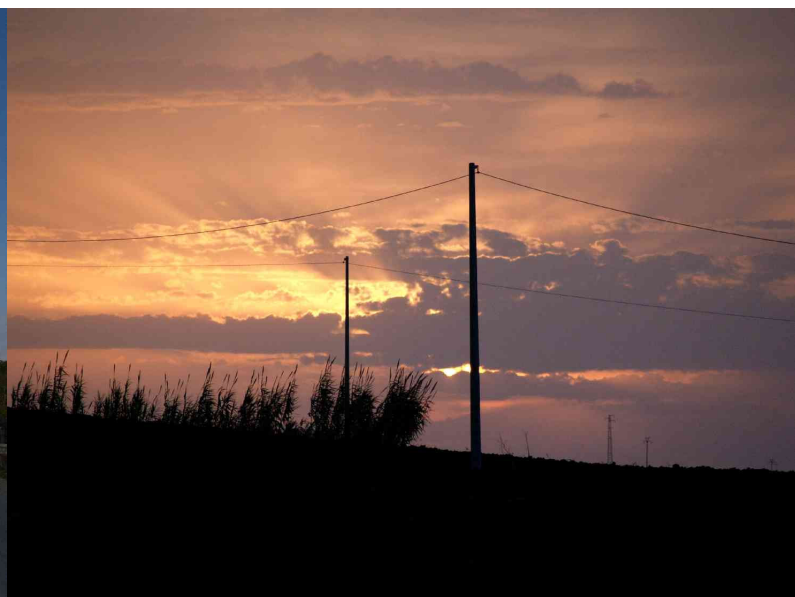
アンティパステイ以外は、給仕された皿から好みの量を自分で取り分ける方式で、小食な者としては有り難かった。

緩慢だけれども、各テーブルを廻り、満面の笑みと共に(多分)歓迎の言辞を述べ握手をする。言葉の通じないことなど、かけらも気にとめる様子がないままこちらのテーブルも訪れた。この宿を営業し始めたのは息子の代からと推測するが、客をもてなすことが心底好きらしい。

デザートも充実していたけれど、カプチーノだけを貰う。勘定はワイン代込みの20€(2,894円)で、内容を考えるとかなり安価といえるだろう。



デザートのケーキと果物。



この日の予定(というほどでもないが)は全てこなし、部屋で悠々と昼寝をむさぼる。聞こえてくるのは風の音だけだ。

4時近くなって散歩がてらブルカ駅を見に外出する。半ば以上諦めているものの、食料品店でもあれば酒、ツマミを調達したい。セジェスタ駅より近ければ明日のパレルモ行きに利用することも考えた。

一本道を歩くこと20分、前方に **Burca** があることを示す道標があった。セジェスタ駅より近い可能性も消え、相変わらずの店などまるでなさそうな雰囲気、前進を続ける意欲を失った。穏やかで美しい夕焼けが、次第に色彩を失っ

て行く移ろいを楽しみながら、葡萄畑の中をのんびり宿へ向かう。

土日運行列車

一晩中風の唸りは続いたけれど、それも明け方頃から沈静化し、朝になって外へ出てみると辺りはすっかり穏やかさを取り戻していた。8時を過ぎているのに人の気配はなく、早起きの犬三匹が歓迎してくれるだけだ。昨日、駅で調べた時刻表によれば、朝のパレルモ行きは7時53分、次が10時53分だった。パレルモに着いてから行きたいところや、したいことが特にないため、自ずと10時53分発を利用することになった。

10時を廻って出掛けようと、すっかり親しくなった犬達に別れを告げていると、オーナーがわざわざ傍らの葡萄畑での作業を中断して見送りに来た。改めて握手しながら、田舎の小規模な宿らしい良さを再認識する。

歩き始めて間もなく、前方を見慣れた二両編成の列車が、パレルモ方面へ走り去る。——— この時刻にパレルモ行きはないはずだ ——— と思いつつも、何となく不穏なものを感じた。ともかく駅へ向かい、到着したのは10時40分、バルは相変わらず営業していたけれど、プラットフォームは無人だ。

早過ぎるから無人は当然と納得、一向に乗客が現れないことも ——— 降りた時が一人だから、乗るとき独りでもおかしくはない ——— と納得。定刻に列車が到着しなくても、延着はよくあることと、鷹揚に構えていたけれど、10分経ってもなお来ないとすると、次第に焦燥感がつのる。丁度保線関係者らしい二人が姿を現したので声を掛けた。

駅時刻表の10時53分発を指しながら尋ねると、英語も話さないし、列車ダイヤにも疎いようなのに、親切な人達で付き合ってくれる。Si effettua nei festivi を見付けると ——— 今日は運行されない ——— と教えてくれた。

後から調べて判ったことも含め、結論は以下のようなことだ。

Si effettua nei festivi: 休日運行。Si effettua nei giorni lavorativo: 平日運行。つまり10時3分発のアルカモ行きを利

用し、終点で乗り換えれば12時5分にパレルモに着くことが出来たのだ。シチリアに土地勘があれば、アルカモがパレルモへの線上にあり、此処から乗り換えの可能性が大きいことも思い付いたであろう。負け惜しみをいうようであるが Si effettua nei festivi は、一応気になっていた。しかしこれまでの鉄道利用経験からすると、土日祝日に運休になる便は多くても逆はなかったため、ついそれが常識と思いこんでいたようだ。

ともかく善後策を考える。次のパレルモ行きは2時51分で4時間近くある。遺跡を再訪する気にもならないし、昼食を摂るならば駅のバルか宿へ逆戻りで、どちらも、特に後者はばつが悪い。それならばと、トラーパーニへ行くことにした。運が良ければマルサーラ方面経由パレルモ行きを利用でき



8時10分ころ宿の前から南(上)と西(下)を撮影。

camo D. (10.20)	*Si effettua nei giorni lavorativi.
ilermo C.le (12.55)	†Si effettua nei festivi. Non ferma a Carini Torre Ciachca, Cardillo -Zen.

駅に掲示されている時刻表の一部。下が10時53分発パレルモ12時55分着で休日運行、上が10時3分発アルカモ10時20分着で平日運行。

るかもしれない。シチリア南西部はまだ足を踏み込んでいない地方だから、たとえ列車で通過するだけでも魅力を感じる。トラーパーニ行きは11時24分発、これはパレルモ発9時40分で、この便を利用するのはついに三度目となった。

10分遅れで到着したトラーパーニ行きに乗車し、車掌を探す。列車の前部に中年の女性車掌がいたので、切符33キロ2.75€(398円)を発売して貰い、次いでトラーパーニからパレルモへの利用可能列車を尋ねた。やはり2時20分で、セジェスタも経由して行くのが一番早い。

10分の遅れを引き摺り、12時過ぎにトラーパーニへ到着した。2時間強の待ちを食事に当てる。この街ならばカンティーナ・シチリア(P. 35)が第一候補だけれど、開店時刻がいささか遅い。そんなわけで駅近辺で妥協するつもりで探したが、これが思いのほか手間取り、レストラン・ペッペに席を占めたのは12時40分になっていた。

毎度のことながら、お品書きと格闘して、第一の料理はスパゲッティ・タランテーノ、ムール貝を使用することだけ決めて決めた。後からの調査ではタラント地方はムール貝の名産地らしい。第二の料理は食指が動かないながらも「必ず第二の料理まで」の呪縛からミラノ風カツレツにした。この二つが決まるとバランス的に野菜不足を補いたくなり、シチリア風サラダをサイドメニューからえらんだ。飲み物は、ワインリストの中からシチリア産のものを値段で見当を付けて、コルヴォノの赤を一壇に、ミネラルウォーター(炭酸)も頼んだ。国内、海外を問わず、食事中に水を飲むことはほとんどない上、「お冷や無料」の日本から来ると、有料の水を注文することには抵抗があった。しかし一月近く旅している間に、ミネラルウォーターを頼むのは「第二の料理」を抜かさないと一般的だと感じられてきたためだ。

先客は一組だけ、いずれも男性で、中年の僧服姿と平服姿、もう一人は二十代の東南アジア系らしい。印象に残ったのは組み合わせが風変わりなことと、僧服姿が度々ワイングラスを口元に運ぶことだ。ワインは(特に昼食の場合)「酒」ではなくて飲料水替わりということであろうが、日本人的感觉からすると、第一印象が「聖職者が昼酒」となり、奇異に感じる。勿論これが「飲酒」であろうとも、非難するつもりは毛頭ない。

料理に関しては、カツレツとサラダの印象はほとんどないけれど、ムール貝は美味かった。調理の問題よりも素材、それも別段ハイレベルな差違ではなく、貝の一つ一つが肥えて味わい豊かという素朴なものだ。日本で食べると、どうも貧弱なことがほとんど



上から、スパゲッティ・タランテーノ、ミラノ風カツレツ、シチリア風サラダ。



パレルモ行き列車の入線。

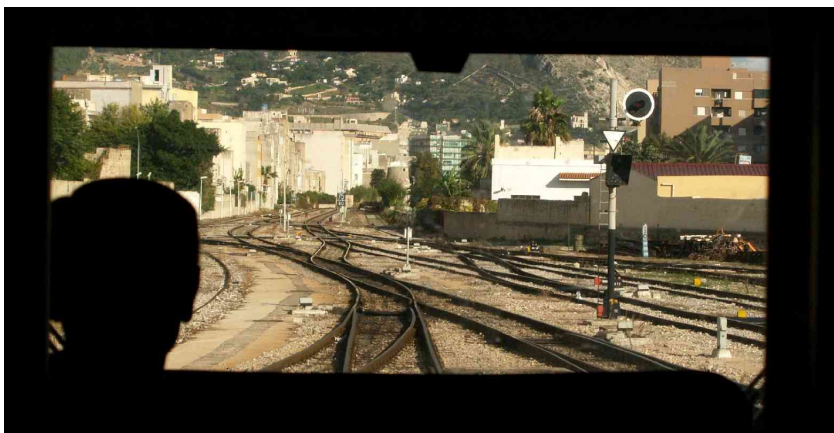
で、勿論それなりに高級な店ならば違うのであろうが、シチリアならば今現在食事を摂っているような街の一般食堂で外れがないのだ。

一時間ほどでカプチーノを頼み食事を終える。勘定は席料2€(289円)、スパゲッティ6€(868円)、カツレツ6€(868円)、サラダ2€(289円)、ワイン10€(1,447円)、カプチーノ2€(289円)であった。

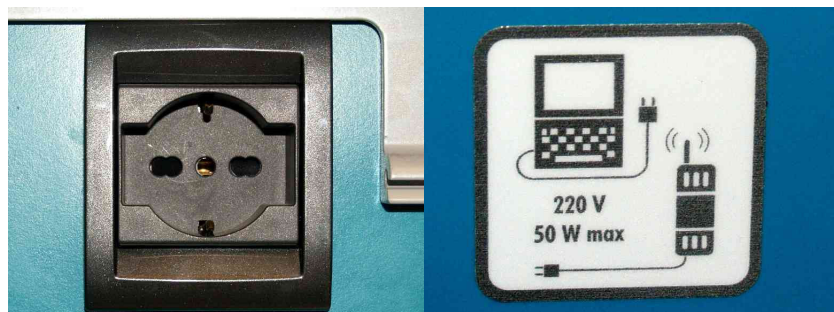
駅へ戻り切符を買って待つことしばし、マルサーラ方面から見慣れた二両編成が近付いてくる。既に二割くらいの乗車率であったが、海側窓際の満足できる席取りができた。やがて定刻になり列車が発車すると、この日の主たる行動「パレルモへの移動」が曲折もあったけれどもようやく軌道に乗ったように思えて一息つく。

通路を隔てて反対側のボックスシートを占領していたのは、アジア系の二十前後に見える女の子であった。年齢からしてもそれほど旅の経験が豊富とは思えないが、既にかなり長くタフな旅をこなしてきたらしく、それが自信というべきか、一種の風格のようになって彼女の廻りに漂う。ノートPCを使用して、窓外の景色など目もくれず熱心に作業している。

ふと気付くと PC はケーブルで列車の



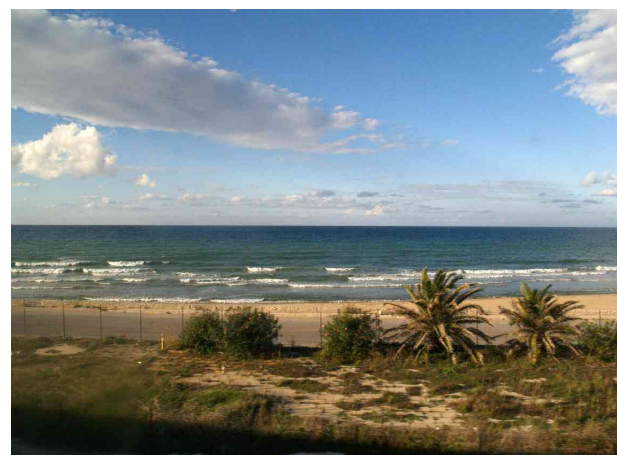
発車直後、トラーパーニ駅構内を出ようとしている。



窓の下に設けられた電源コンセントとその説明ステッカー。

壁に設けられたソケットに繋がれている。まさかローカル列車がインターネットへの接続サービスを提供しているとは思えなかったものの、正体を確認めたくなった。対称的な位置を見ると自席の方にも小テーブルの下に何かソケットがある。テーブルの下に潜り込んで、老眼鏡を掛けて正体を確認するのは(若い女の子の手前、見栄を張ったのか)気恥ずかしく、カメラを目測で対象に向けて二枚撮影する。映像を見ると、正体は電源ソケットであった。

アルカモを過ぎると海沿いの明媚な風光の中を行く。しかしこの景観も四度目となると、いささか飽きが来たのか以前ほどの感慨は生じなかった。



空港のあるライシ岬の手前。

パニーノ・コン・ミルツァ (Panino con Milza)

パレルモに定刻4時5分に到着、すぐ宿探しに掛かる。以前泊まったトニックは、悪い宿ではないにしても、駅からは遠くて不便で、おまけに少々高い。前回手に入れたホテルリスト(ブック)で、今朝、出発前にマークしておいた宿を順に廻るつもりだ。ちなみにこのリストは値段と地図を備えているのでこのような際に便利。まず最初に訪れたのは、駅から100メートルのサウセーレへ。

概観は古びているが落魄しているような雰囲気はない。内部も外観に似合ったもので、交通量の多い表には面していない部屋も空いている。料金一泊朝食抜きが50€(7,234円)は、パレルモ中心部であることを考えればお買い得といえる。他の宿を見るまでもないと、チェックインした。

パレルモにおける足場が定まったところで、友人知己への土産物を調達に出掛ける。——— 値が張らず、嵩張らず、壊れにくく、シチリア(イタリア)らしさのあるもの ——— は何か、ほぼ一ヶ月を掛けて探した結果は、ポモドーリセッキ (Pomodori Secchi: 乾燥トマト) とフンギポルチーニセッキ (Funghi Porchini Secchi: 乾燥ポルチーニ茸) だ。

乾燥トマトはノートの大衆食堂カルミネ(P.76)でアンティパスティの一品として供されてからマークしていた。ポルチーニセッキ(乾燥キノコ)はチェファルーで乾燥トマトを見つけたとき、同じ店にあった。トマトよりも軽し、(人工栽培不能の)ポルチーニは日本では採れないことも気に入った。チェファルーでそれぞれを少量サンプル調達したけれど、パレルモの下町ならば、価格も安かろうと

手控えていたのだ。

「サンプル品」からトマトはシールをはがし、キノコは20g袋をそのままカメラバッグに入れ、フロントで教えて貰ったスーパーマーケットへ行く。店内を一回りし、どちらも見付からないので、品物を整理していた女店員に尋ねると、キノコは現物を見せたため即座に売り場まで案内してくれる。ところがトマトの方はシールが行方不明になり、おまけに Pomodori Secchi の発音が悪かったのか通じない。

英語を話さないけれど親切な人で、店では唯一英語を解するらしい(アルバイト風)店員を連れてきた。ところが話は混乱するばかりで、生のトマトを見せられたりする。礼を述べ、一旦は打ち切りにした。独りになり、落ち着いてカメラバッグの中を丁寧に探すと、やはり入れ忘れはなく、当該シールが現れた。

これを手に持って先程の彼女に示すと、即座に理解できたらしく顔がほころぶ。案内してくれた一角は、ショーケースの向こう側に店員が対面



黄昏のパレルモ商店街。上: 中央駅付近: 下: バラー口市場。

販売を行い、ピクルスやチーズなどが並んでいた。辿り着いてしまえば、なぜ思い付かなかったか不思議にさえ感じられる。量り売りなので約1キロを注文し、レシートには単価が7.9€で重量が1008g7.96€(1,152円)と印字されていた。

レジへ向かう途中、さらに乾燥キノコ20gを二袋3.66€(530円)と、ジンジャー6.33€(916円)を拾って一緒に勘定する。この日はこれで買い物を終わりとして、買い込んだ荷物が2キロほどになったので、一旦宿へ戻ってから出直す。残るはパニーノ・コン・ミルツァを探すことだけだ。

ちなみにミルツァ(Milza)は脾臓のことで、パニーノはサンドイッチだが、伝統的なイタリアの丸いパンを使用する。脾臓を食べることなど全く知らなかったが、インターネットでシチリア郷土料理を調べた(P. 21)際に、このメニューが店の住所と共に知らされた。この時入手した「グルメ情報」は、他にも色々あったけれど、有効活用できないまま旅も終わろうとしている。——— せめて一つくらいは ———、と思いながら黄昏れた街に行く。

目指す住所:アレサンドロ・パテルノストロ通り(Via Alessandro paternostro)がどこなのかを、セジェスタなどで暇なときに再三、パレルモ市街平面図から見付けようと試みたもののついに果たせずにいる。諦めて中央駅の観光案内所で尋ねると、駅から5、6分のところをボールペンで楕円形に囲ってくれた。ローマ通りから、入り組んだ路地に入っていったところだ。

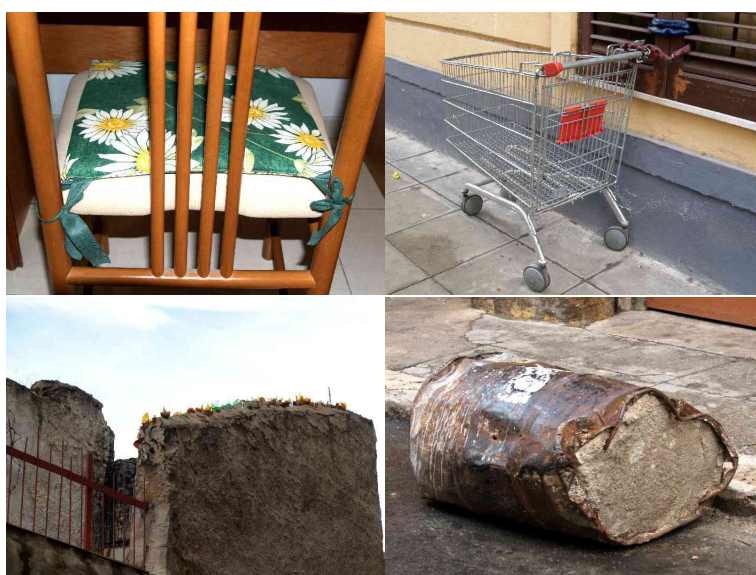
慎重に平面図を確認しながらの前進であったため、迷うこともなかったけれど、表通りを僅かに踏み込んだだけで路地の雰囲気が一変するところが面白い。別に不穏なところではないが、「シチリアの下町」が濃厚に匂う。目指すアンティカ・フォカッチェリア・サン・フランチェスコはカーブを描くパテルノストロ通りの中程にあった。古風な外観(1834創業とか)は期待をふくらませるに十分なものがだ。しかし近付くにつれ、雰囲気がどこかおかしく感じられた。

ドアは半開きだけれど、中にひとけが無く、営業しているようには見えない。踏み込んだものか躊躇していると、従業員らしい若い男が顔を出した。呼び止めて訊いたところ ——— 営業はするが、夜は7時からだ ——— とのことだ。この限界で待つにしては一時間以上あるし、だからといって出直す気にもなれず、この日は諦める。

パニーノ・コン・ミルツァを持ち帰ってツマミにするつもりが、すっかり目算外れとなってしまった。

宿への道すがら、ツマミになりそうなものを物色するけれど、中々適当なものが見付からない。何しろ明日は帰国だから(食べ物を捨てることができないので)、今晚中に消費しきれることが条件だ。宿まで残すところ100メートルとなり、仕方なくハンバーガーを購入(値不明)。

朝、利用すべき列車を間違えたことに始まり、不本意な一日であった。ツキが落ちているというより、旅も終局となり、気分的に緩みが出ているようだ。明日は事故など起こさぬよう、気を引き締めて行動しよう。



左上:宿の椅子にセットされた座布団。日本では珍しくないがヨーロッパでは座布団だけでもあまり記憶にない。右上:カートが民家の錠戸にロックされていた??左下:塀の上に泥棒除けのガラス瓶破片。小説などでは知っていたものの、実物を見るのは初めてだ。右下:シチリアには生コンならぬ生漆喰があるらしい(裏は取れていない)。それが運搬用のドラム缶の中で硬化したものらしい。

11月17日、一ヶ月の旅もいよいよ最終日となった。天候は高曇りの気温17℃で、風もない穏やかな朝だ。9時に宿を出て、パレルモの下町といえそうなこの界隈を路上観察学的気分で徘徊する。

半時間ほどで雰囲気の良い路地を一通り歩いてしまうと観察にも飽きた。何しろ学問ではないまい物だから、「定点観測」や「詳細評価」などの時間が掛かるところまでは発展しないのだ。では路上観察を終えてどこへ行くか。

(モンレアーレで入手したため、前回のパレルモではまだ知らずにいた)「芸術と歴史の島 シチリア」を読んでから、ノルマン宮殿の三階部分を全く見ていないことが気になった。——見所が多そうなのに踏み込んでいないのは、現在非公開故か、はたまた単純に見落としたか? ——と思えば、時間はふんだんにある今、10分足らずのところにある宮殿へ向かうのは自然な成り行きであった。

入り口は既に勝手に判っているのですんなり通過したけれど、宮殿に入った後は慎重に「順路」などを見落とさないように確かめながら進む。二階のパラティーナ礼拝堂は再見の価値ありと思っていた。実際にこの素晴らしいモザイクを凝視すると、再見のみならず当分は繰り返し見ても感動は失われないであろう。堂内にいたのが、初老のアマチュアカメラマン一人であったことも良かった。

間もなく彼が立ち去り、しばしこの素晴らしい空間を独占する。じっくり鑑賞し、5枚ほど撮影した。2回フラッシュを使用したけれど、他人がいなと思えば気兼ねせずに発光させることができる。

礼拝堂を再見したことで、この朝払った5€(723円)の入場料は、「元が取れた」ように思われる。しかし当初の目論見であった、三階部分への入り口は見付けることができなかった。丹念に見て回ったものの、係員に尋ねることまでしなかったのは、気分的に旅の疲れが溜まっていたのかもしれない。

結局ノルマン宮殿で過ごしたのは半時間ほどであった。同じ門から出て、ルツジェーロ大通りを南東へ向かう。オルレアンス駅を調べておきたかったためだ。



クリスマス商品の屋台が増えつつ 日用雑貨の行商。つある。



パラティーナ礼拝堂後陣のモザイク、「祝福を与えるキリスト」。



既にP. 27に記したことだけれど、モンレアレからトラーパーニへの最適ルートを確認しておきたかった。あの時、駅名と階段の行き先表示を見て —— この駅を利用すべきであった —— ことは、ほぼ確信していた。今後パレルモを訪れることはまず考えられないので、それ以上調べることに実際的な価値はない。



それでも執拗に地下駅のプラットフォームまで降りて、モニター表示のトラーパーニ行きを撮影したのは —— 紀行文に書く以上は、裏が取れることは手抜きをせずに実行しよう —— と決意していた故だ。紀行文を書き始めた十年ほど前には、それほど固執することもなかったのだが。

駅を後にして東へ向かい、バラロー市場の食材を眺めながら散策。前回と変化はないのに飽きない。たまには発見もあって、パニフィーチョ(panificio:パン屋)の看板がある店でパニーノ・コン・ミルツァを売っている。簡素なテーブル席もあり、ファストフード店的な商売もしているらしい。11時20分と、昼食には早過ぎたので、ともかく記憶にとどめておく。

左上:オルレアンス駅。右上:ずらりと並ぶ煙突状のものは、地下線路の換気口。ディーゼル車が走るせいか数が著しく多い。下:駅の行き先案内。一番上にトラーパーニ行き。ちなみにこの日は40分の遅れらしい。



脾臓(Milza)も売っているパン屋。

内臓肉を頻繁に見掛ける。

市場の外れから適当にマクウエーダ通を目指してゆくと、外見は地味ながらもどことなく気になる教会があった。市街平面図によるとジェズ教会だ。

扉を押し開けて中へはいると、絢爛たるバロックの装飾に圧倒される。「芸術と歴史の島 シチリア」によれば(種本はこれしかない)カターニャやシラクサの大聖堂がシチリアバロックの典型として紹介されているけれど、この二つはどちらかというとファ

サードの華麗さに特徴がある。一方この教会は内部のとりわけ大理石の装飾が素晴らしい。至る所に飾られている彫像も見事だが、柱や壁などのどちらからかといえば何でもなような部分に施されている大理石の細工が凄い。



柱の大理石装飾。



ジェズ教会後陣。

マクウエーダ通とその延長線上にある
ルツェロ7世通りを行き、寄り道、道草を
繰り返しながらも、いつしかカステルヌオー
ヴォ広場へ辿り着いた。12時半近いこ
とだし、この境界で雰囲気の良い、そして
できればオープンエアの場所で食事を摂
る気になった。

ところが(人通りも多いことだし)レストラ
ンなどいくらでもありそうに思えたのは見
込み違いで、虱潰し的に周辺を歩いても、
意に沿うような店が見付からない。後から考えれば、オープンエアにこだわり過ぎたのかもしれない。
いつしか広場近くからベルモンテ通りを港の方へと辿っていた。

——— この先は住宅地で食堂はなさそう ——— と思った辺りで、一軒の軽食堂が目に入っ
た。道に面した側が全面ガラス張りで、開放感があるとはいえオープンエアなどではない。しかしな
ぜか吸い込まれるように入って、パスタと赤ワインをピッコロで注文していた。

ワインはともかくパスタが異常な早さで運ばれて来る。訝しく思いつつ一口食べて早さの理由を
知ると共に、その不味さに驚いた。延びきってぐちゃぐちゃのパスタだ。何口か無理に食べているう
ちに、己の不手際も含めてこの事態に憤然とする。これでは手打ち蕎麦の名店を求めて、立ち食
い蕎麦スタンドへ紛れ込んだようなものだ。いや、立ち食い蕎麦は時々食べて残すことがないのに、
この時はそれ以上食が進まず店を出ることにしたのだから、こちらの方が遥に悪い。不味さ故に食
べきれなかったことなど記憶にないから、最悪のパスタといって間違いないのだ。



左上：街路表示。中段は何とヘブライ文字だ。右上：タオルミーナの街灯(P.130)
を思い出した。左下：カステルヌオーヴォ広場のガリバルディ大劇場。右下：最悪
のパスタ。



5€(723円)の勘定を払うために奥へ行くと、オヤ
ジらしいのがパスタを電子レンジで温めてはソースを
掛けている。改めて「鑑る目のなさ」を罵りながら店を
出た。

このような店に入らない選択肢はいくらでもあった。
一ヶ月前スパゲッティを食べた(P.10)店は、此処から
徒歩2分だし、昨日諦めたアンティカ・フォカッチェリ
ア・サン・フランチェスコやバラロー市場で見たパニー
ノ・コン・ミルツァの店へも10分あれば行ける。我ながら
不可解な行動だった。

ぶらぶらと宿の方へ向かいつつ、既に何回か通った
路地で、好みのものを拾ってゆく。青空を背景に聳え
る、聖イグナティウス教会の鐘楼は見事で、その前の
小広場は乗り入れる車もあまりなく、落ち着いた雰
囲気になっている。一角にあるバルが、表にテーブル席



脾臓をスライス。

を設けていたので、此処でカプチーノを一服。見上げる空を悠々と流れる雲に、旅の終わろうとしている感傷を重ねる。

宿も近くなってバラローロ市場の方へ寄り道をした。既に食欲は失せていたのでパニーノ・コン・ミルツァを持ち帰り用に注文した。目の前でスライスしたものを、フライパンで暖め、ソースを掛けてパンに挟む。作業の様子

を撮影すると、オヤジは手を止めて —— もっと撮らなくても良いのか？ —— といった表情で、こちらを窺う。グラツィエといってから身振りで、先を続けて貰った。

ちなみにこのパニーノ・コン・ミルツァはローマ空港で、乗り継ぎ時間に食べた。すっかり冷え切っていたのにそれでも美味だった。これが熱々ならば、あるいは創業百七十年の老舗が誇る味、はたまた隠れた逸品があるという港界隈の屋台店が供するものなどであれば、どれほど素晴らしかったか。

食べ物に拘泥することはほとんどないけれど、こればかりは思いが残った。しかしだからといって日本で脾臓を調達し、味を真似してみるつもりは全くない。やはりサンマは目黒、ミルツァはパレルモだ。

搭乗便変更

2時を廻って、キャリーに付けたまま宿へ預けておいた鞆を受け取り、中央駅前広場の空港シャトルバス乗り場へ向かった。パレルモ発ローマ行きの出発は夕方6時だけれど、ローマから成田まで12時間以上辛抱しなければならないから、何とか通路側の席を確保したい。そのためにパレルモでなるべく早めのチェックインをするつもりなのだ。

2時半に発車したバスは、一ヶ月前にパレルモに乗り込んだ道筋を忠実に逆戻りした。懐かしさと、旅が終わろうとしていることが実感される。市街地でこそ多少の渋滞があったものの、大して時間も掛からず抜け出すと、後は高速道路で一気に空港へ。40分ほどの乗車時間だった。

こぢんまりした空港ビルだけれど、チェックインカウンターの所在が判らず、 —— 探すより訊くが早い —— と、目の前にあったアリタリアのカウンターに寄る。六十前後だろう、窓口業務には貫禄のありすぎる大柄な紳士が指差して教えてくれたのは、背後30メートルほどのところだった。

礼を述べて移動後、預ける荷物もないチェックインは簡単に終わり搭乗券を手にする。しかし思わぬ誤算があった。いかなるシステムの問題か、ローマ、成田の座席はパレルモで決められないのだ。これでは何のために出発の三時間前乗り込んだのか。



上：パレルモでもダブルデッカーのオープン型観光バスを初めて見た。日本語の(たぶん音声)ガイドもあるらしい。左下：シャトルバスの停留所。これはカステルヌオーヴォ広場。右下：空港、トラバーバニへ通じる高速道路。

なかば呆然と手にした搭乗券や、モニターに表示されている出発便を眺めているうちに —— 搭乗便の変更を交渉してみよう —— との考えが湧き上がった。3時55分発、ローマ着5時5分の便が利用できれば、ローマ発8時45分に対し、充分早めのチェックインができる。航空券は「格安券」だから、搭乗便の変更はできないことになっているが、空席が充分あるならば、航空会社に不利益にならない故に、応じてくれる可能性はある。駄目元であるし、紀行文執筆が育んでくれた「取材者気質」も背中を押す。

今し方チェックインしたカウンターに戻り、担当の青年に要望を告げた。答えは予想通り No であったが、その断定的ではない口調に、もう一押ししてみた。彼の表情に逡巡するようなものが浮かび、 —— 私では決定できないので、上司と交渉して欲しい —— という。示された上司は先程チェックインカウンターを尋ねた紳士だった。アリアではマネージャークラスが窓口で対応することもあるのか。

30メートル戻り、改めて搭乗便の変更を頼むと、彼は席を立って裏手の事務室に行き(多分)空席状況を確認してから電話を掛けた。席へ戻ると —— 変更はできる。あの女性に(とチェックインカウンターの一人を指しながら)指示してあるから、そこへ行きなさい —— と、嬉しい答えだ。

無事に便は変更できたけれど、今度は出発まで余裕がない。搭乗ゲートへ急ぎながらも、謝意は告げたくマネージャーの方を見た。視線が合ったので手を挙げて、グッツィエと叫ぶ。彼は旅立ちを祝福するかのように、大きな親指でゆっくりOKのサインを送ってくれた。旅の最後で心温まる思い出がもう一つ。さあ、後はローマ空港でもう一頑張りだ。

—— シチリア紀行完 ——